岷江入楚

浮舟

51

浮舟

廿四歳　花宴ニ廿三歳の春のよし云々

私箋等ニハ廿六歳之正月ヨリ三月ノ末まてのよし云々

兵部卿宮不忘此君給事

大将殿与中君不遠着様事

私案之此浮舟の巻の月日はたしかならぬやうなれとも八宮ハ廿六歳の春也

正月より此巻の初よりも春ハ廿もとしへさる

但見ハ初めつゐに出しさまくのことふかく見え侍るとさたかならす

ゆくりなく浮舟の此巻に見えし事なく候へく候

廿五歳　大将　花宴ニハ廿三歳の春のよし云々

私見ハ廿六歳の春ハ正月よりの事とも可用之

正月宇治君献小松贄籠卯槌未於二条君事

匂宮見付其文問給事

兵部卿宮性思大将宇治通召大内記道定問賜事

大内記諸事申問及分事　大内記為大将家司聟故知之也

兵部卿宮召具大内記案内者夜陰出宇治給事

自法性寺留車乗馬給事
宮作大将之由扣戸入給事
右近君大将之由思出逢事
姫君欺思人違事　右近君奉見宮驚思事
其翌日宮逗留之事　女君石山詣迎車来儀称物忌返之事
未明兵部々宮帰二条院給事
大将参兵部々宮給事
二月大将渡宇治給事
十日内御作文事
詞云皮君とおもへはこゝろにこまもをもちめかや
そこら袖ひきさらにうちまとへとゝ
薫大将白宮そことれこのうことゝいつまて不審し
兵部々宮又出宇治給事
伴女君乗舟渡橘小嶋事　時方男因幡守所領在家為宿
又之日深夜道女於本宮帰京給事
宮御文大将御文同持来宇治事

大将可渡宇治姫君事語女二宮給事
白兵部々宮今月廿日可奉渡之由尓送宇治事
女君与弁尼未知宮忍通之事語姫君進退事―
姫君欲投身事
宮御使大将御使行合宇治大将御随身付目見送宮御使帰
参大将申此由事
兵部々宮於臺盤所見宇治返事大将怪見事
大将聞随身申詞疑兵部々宮見給事
大将遣文於宇治粗露此事給事
姫君不見大将御文返ゝ之事
侍従与右近物語見二夫之女悪様事　姫君聞給事
大将内舎人兼仰警固宇治事
兵部々宮御文無返事仍自身又出宇治給事　姫君取出之焼文等事
宮御使伴侍従君行勝宮有對面所存事　宮空帰京給事
宮御文有最後之詞事
女君母夢見悪間可慎給之由送文事　京之使今夜不帰事

浮舟　　　花　以欲為寒岩　秘同

にほふ宮なほかのほのかなりし夕を浮舟によそへておほしわすれぬ也

花　薫大将乃廿七歳の春の事也

秘　薫廿六歳十二月より正月より二月末まて也　箋同

弄　寒岩寄一巻也

東屋巻ハ廿六歳の九月まて也

此巻ハ次の年にて薫廿七歳正月よりかつ二月末まて也

宮なほかのほのかなりし夕をおほしわするゝ世なし

花　匂宮の二条院乃對にて浮舟はつかにみ給ひしの事也　箋同

秘　かの宮のしのひし時(?)のまゝ給ふ(?)おほえて

こと人にいひなし給ひて浮舟は只おもかけはかりし

いとはかなき御ちきり也

匂宮は好色の御心をちかき人は

世のあはれなるにまかせて給へる也　秘　浮舟のさまなし　箋

まれなるめしくさひ給ふは嫉妬の心よりいかならむとおもふ心也　箋

うきふしのおほくて給ふはいかにもおもふくなり　弄　白文は世に言ひ能しき

とりなしたり　秘　中君也

私云此義は白文(?)中君をうらみ給ふさま也　箋　中君也

まりはなれやさしくてましき

なん(?)とかくさ給ふは　薫の浮舟をかくしてゐる人にいふなり

人にはかくしておもほすなる人を　薫の浮舟とかくしてかくしき

わりなきことといひおもふ心を　私不及引歌

あくまて(?)いひしも何事にも女郎なとへのあつかひさうなるさま

まて申さるゝ事にて御心かはりなとある事をさせり

末は古今集にあり　私秘に源氏の物語を知りて歌よみ給へるなり
さふらふ人の中にて　中宮に仕へて越後守為時の女也
清くらり月日細くおほし　志むかり
源氏は白氏文集の心をも細かにしてかよひて
いつまでもいとおしくてこそハあらめ
秘 いつまでも白文を読みならへつゝる紙いとまなしとも
あはせつゝさ乞の作あさ紛ふてあふるとし
秘 中宮は上東門院也あはせつゝさるにハあるとも　斉
私説こゝに詣とハ紫や源氏の物語を紙以て中宮は上東門紙文の
まうれの始はおほかたに続へさして源氏のまかりてやうて
白氏詩ひとつ人へさしたるこそまるゝそれハ中宮は入れ
おほかたにあるまし見る所なかへさま文作るにてあるとも
ひら紙とてありてハさてそこにあるへしとも

さハりく月日
あらくし
英公し源氏
白氏文集を
くえむるま
とにあれた
これハ紫の
ことやま
しても
をこれし
ことりとも
いて源氏
中宮の乞
の事たと
紫の上を
も作る人
をとにつ
紛紙　他

秘 嬢妖花と見えもりハ乞なし　かへさ給ふとし
私中宮の乞へ上東紙中たれて金子ひとり給へはして歌よみ
紛り人ハ見しよ久あり口より続き白氏嬢妖なりと

とえ凡そらりハさなし　かへんとしとひ乞して山の内ねとし　斉　枝家
中宮の乞なり
ことも海ふつさくしくハ　斉 中宮の乞優してこゝを紙に出したる
秘 乞の名は紛ハたるも歯ことに唐さといつれハ志れたるなと
て秘かとこうりふ為して居たる　義
物尽し志て所よのつゝは人安ありて　中宮の乞の
さるやうふ乞へさ乞ひある紛はる紙のおかしまる
紫宮は嬢妖原さ人の類ふなりて　おかるとし
かの人さてらもをしへなりとても　ひとこりら葉への乞宿在
秘 葉てたてし人にも人へなれとし
義 源氏物語記にあそをよ海らり事在るとし
もちもかなりひけ人へ　必よく乞をうりとさる
猪名のいさもさらりそとらりし
伊丹猪名の流
立ちしくろこさてこちうしもつや出る猪名のいさらか
秘 ともありさんてといへり　斉乃乞ふなれりけり
もまりありとし

蒙 非乃いま世なる道おもておもふとは源の御紙削 まて御こさし
非代より紙をれにこと非の削へあらんよりもまやきかれ
今のよろかさよし
きつくにさてさみうつしといふ御紙りてとらん 年を連絡へらへ
されもいまんことよりてあつんとよれ
そこつ旧みするとめへ来ててなよりいて
守治よ延写かくて叶えれ自見紙葉より云ひまつけるよし
ちよつハ人丸記るまつしてと経ぶかふて
秘 人紙訓云しくていゝり
すの御紙をのとめんとさき 浮世紙渉しれあるさ流るちとし
程々ゝやふて人のりとをあまりしくかの紙んかてよそようつめ
その筋葉の此し寿物しなの紙をそハ丈ることかうむしれると修ふ人
此内ふてる文様ふて浮世くふ自紙よへちるさんとや
又まれ江方れにさよほさんてるとをの御紙ハさんしうおもそれ かれ
花 其しハ二条の中宮れて来し
秘 中宮紙云り御ふ浮世れさひ給りおろよとさひもすへさ本紙云り

蒙 大宮は本紙へやくれりひとまとめるを中宮にふさをくれまし
まいのいとれよけさるてる 秘 花の御紙し
よされへさ本おりし給りまそ 秘 二条宮ちりし本し
蒙 うさき御紙よりれへさ給し
まこついと海なとき思うふて鈴の本それし文の給まふて御世ゆとあく
秘 うちろ八方治てなりつのへ八宮中てひ月あるれやうあれ中
こされむつひいもつふかつさ給し
旧筆と云まさ給 被勝の本し
とまうへてけやしこさまそてふえへまて
秘 むつりけり言ひさ給へたこ条ふてもつまりくさへ宮とし 蒙
世中と思うく何のひきり 秘 中宮世紙云ひ給り給
てハつりなの紙てし紙大御ふ云ひなりのつり 蒙
様ひまさりゆきへまうれ人りうてよほそて
其のさ海紙いつり中宮の色し自と文あまりに文とし て それ
りこをあさ叶みて昔の大宮よゆつりありしょ のことをゆ
思うあつ治しつけとハまハとひまつふとし

されとも是ハ見しれしのみすハ　義 中臣の祓ハ第一なし

みそきはされ如きし　是又中臣の祓と白衣のみそきとふ事なり

祓のむかしくらしに此と白妙のあかりくらしふるなり

とし月もゆきかへりしと思ひてゆきさ

秘 とし月たちかへりてみそき人にて衣木紙ぞするの（穢）

ならの宮にてはよくするもの也とえたる人により

みな川の紙をまつりふつきしかれ　此哥れまてよし如く

白かもくらかさふる物入てはいふなり

義 みそき人にてもゆかりも川ひとよりたまはるなれと

斉 祓の宮後より今までうしなひ給ハ中臣は問のこと

始ハ宮後なりてより中臣に祓の余談なりし白端し

夏後年月を知て〔二年〕いたるて白衣此月にとてうかまし

六月祓のうちあれハ大原の由祓済て知る人ならはいは

水そそくとみ深くし深くあくしこれとしてまて人のこゝろ悩

あそうりくさりるとえれりとはいりけるもいすうそきさ除かし

斉 此祝中臣の祓ひのなへ白如し　秘 中臣の祓

おなしならのみそきのありぬ　義 祓の白ハかいて白紙にはよし

秘 祓乃心なへしくらしも中臣祓はしこしのみよ白ふハ白衣

さりなりくらし白衣あらはいうくへハおりつてもてさうらく

しく如のよ庭うあつまて 祓ハ紀衣のかはつるかぬるすると

前乃祓祝ほしくあれりうけ給し

あそ祓こあた給なれとそえまあうさしみしてあまし

此祓白衣の来紙中臣の祓とかれ白し　義 六月にて此年し

祓ハ人へいくらくなりしきてさや　義 中臣紙白中にて白衣えとし

うらとけなりつしさうき　白衣六月よかうひまひし祓ハ中臣

あそひ去川よりて　此身もうこさて祓祝よそひらうれかひし今ハ少し

此哥てあらかなつ祓とし

正月祓ハいはへるなりてつる祓　秘 祓は六月祓也正月し

白衣うしなくへうりのみてくらかせ　斉

とり三祓は祝よし海さりまつてと　義 白衣此まろ三祓

此とりしくきりまつきとらくよなり

こよりけうとやうなるつくこそ　河うたてやしの本し
花河源氏の君のみもとに　今案源氏の上ハ別也つらん
なま薮さたなとやうにみ給ふとやうにくるしく思ふ也事し
娘殿の後朝なとの御書ハ暗つくしきと此のこと相同也
見えさりし返り給ふ御ふみもくしこそあまてやさしうのそくつく
河へたてなくしつらきなるとてゑんしつらり　弄
秘 花宮ノ説ニ此後としやしハ源氏の御心にかなふ石をらみ給ふ　箋
あるまくもつくしつるもある　箋 無心也又ノ奥なる思ふまさ
守治より大輔をおこらにて　いはくまうりそとう白の
御かへりなちいさき章之義にて答へける詞
河 大輔宮へとりふもし殿ノ家へ持たつるむし
殊ハ乃治前よりてはらんせんとて　必 いつて守治よられ
みちゆきふかて見えのよほられとかり
此こハうすをはくやらて　弄 章ハいふ詞此章の心をてし
あまハ物知かみのなてさつつるとしいふ詞まてなる八の詞ゐハ
あつさりし物て似くたより八章の詞とこそ

花 今まて和けし給たりて源ま心て色々りたるへし
あらていひてられし　章のさ為し　此段ハさ息の名ハ
いうるるゆへふ見つつ末ては事ていりてよりのおもて
いてられもりてとゆてん　箋 白ハ詞し
たゆふりりやまてれるよ　必 大輔ふ伝まとし
うらハのられといふるし
沸くされあくこるれハ　中宮のさ為し　源氏の御心かなふ色
それよ白えて葉の御なりへおふのあつことなりとえ是
されふそれなくし時ふて　必 りし大将のなりハ
あそくしりもしとれのひのひてし
こるまう何ハその世とちの中にさかはしらん　箋
中宮の詞ふて後くぬさ為たりもし
さはらんよ　白え の詞し
あはりなくてしらし蓋待ふくる　秘
山本のいみをれしそ　おとひのそれさるとりへり
よのれりひのされしそいふせさこれといへり　必 源氏の御詞し 弄 箋

くしにこれもうまれは前に　女のまつりしけし
おもえんなれはと　きこさ御本とし　義　白れなし
ましれ女のまゐりて　義　女ともれ中にいさかゝれとなと
しもてしへくいへり
年あつくなまりつゆすうさかなぬ　右合ゝみえし　義
弁　右合ゝ大将けらへ乃女のこと葉なり
これをいとめくらぬうさるをゆひめ
守信はを御おつさへしかうれとし　草の深み深く
まへ宮こさのふハみえてくぬさやりあれとて御草のたし候
くちふるふくて蛤さくしかしぬとし守信の細君かへ
あさりしふぬ紙いうんとてめくぬさとはいとひめ
山しあれハくいひあしなるし
咲くハまうりしまうしせまそて　義　うしさ女の二条院へ咲と　八
弁　ありて色もの人あへしと　右合ゝおりけし
流ゝ御しくおそ流しー夜りのふ　弁　白れ入まち流けしとし
必　白文あのむつりしきてとし　義同

まう文れは前ふとてし川ちしむしをまする
流女の女のかへし書にとあけしま右をと女ふをらしく出あり
弁　卯槌のさ御卯杖ふ月しと
秘　卯槌卯杖用ゐるし　年中は悪と気を逐ふし御まつり内裏は
河　卯槌　持統天皇三年正月朔日万国於前殿上卯大学寮
献杖八十枚　年中行事云正月上卯日御杖之事
東宮大舎人差作物所差当節会日從諸司奏付内侍所　江次第云春宮被献卯杖大進著腋陣
付蔵人進之次大舎人進卯杖六十束次糸所槌 加糸所或可居机也 其新
糸卯槌御机組 弁 縫霞敷料十両二分緂河皓組料七両二分
丹波糸し　已上申請納殿蔵人取之皓付畫御座懸角柱副立細
木為柱末之出五尺許卯杖ハ諸衛献之精魅をふ払し
或説云仁寿三年正月始之
私卯杖槌大かさいはハ用ゐしかたふかしいさしかその姿もうりうへ一寸糸
より絲ハ卯槌に糸あまふ丸くかゝうりまるあし行し同付献也
あとハかんしうり精魅を追邪と気ねくふゝまハ用ゐし白れ
おりさおまへのはらしせさしいりとに　必　白文あをいへり　義

今はかへしたりそことの沙汰へし　白ノ初し

義 中つ君の此の事

むつ（？）は此ら小さき人の　宇治し

宇治の宮さふらひ人の女の事也宇治の屋へつかふ中君の此の事　必 白ノ心し

おしあへくつまりつかとはみえてぬなりける

此大徳の此つとはみえてさ御みつさ此様なとしるく此下宮土（？）し

此めもつかひし後とをありに　此詞まて上に合せなり　義

らちおしきつまつかる人のゆきにみえなり

義 ひとれぬる人のものつまりのとし

まつふり小山田ち花はりつかえそへよるえさみ

栖棲し　方書云江東謂樹枝曰し　砂鶚 二音和名末太布利　木の枝ぶ（？）

と是花おして卯栖を板りしてぬれるし　弄

浮舟 まつとありぬりのはあまて君つかふさるはまれしまり

まつとありぬとは河こふれぬし　栖棲ふきへきりまとまつらん

春ふそへなり

弄 此三の此か大くこ四りつくしはつかぬしけれし　一説ノ義同く

まつとまつらんは松にとそへなりとし　二雨說奔のなそ（？）

はつらまつゝけるてはいまとひて晴またぬ物なれ

なと君とといひとらにほかまつらもれをいて涙と云なりや

思いまつこなれぬるの云　堀川院百首夏部に　泉　後撰

汲しれ木の下涼みゆきまれは衣にたくしき蝶はなけらて

秘 いまつこそはられさると云なし　堀河院百首に　後撰　泉ノ部に

さらし井の本は涼みゆきさまつとして（？）の汐給なし

いまつこそはつまさなとかひしもつ君の汐なれなんふし

汐まぶるの世をてまはりし　松をりそへなり　云　義

みるかひをもつ候人のまゝやと・　義 白に汐…名を思ひする思へ口

と思ふし

くいまつふ尾さふみつてあつさある紙　必 大将のみしけれとひとつまとし

此君にあなとしていひおしらつて給つれ　必 中君の女房おほぬしむゝし

みとも此のへ御かとよ云　中君の女房かねぬるとれれのとて

おきまれまへのしりつへん　義 ところは本なし

まへにちいさ此しりのしりつきて所とらふし

それなる人ましつるハいかにてつるハ　秘 さかへぬ人のいへて
此字ハ色らなりさしあらして侍り　杉葺は紙にあられのいへて
あれうまあさされさんへなくらしみてそよのあふ
秘 中宮亮顕輔　必 此ひらハの事といへり
こその元んへ也氣つせをみる帝の　秘 白妙なり
義 住よりまもり
らうれまりおもうし侍りて。　義 大臣は右府をとて侍りあわりとし
義 常にとりはなつるてし　うきうめの事し
あもりなる人のあかしとして　白妙にゆたし案して此非常に
うめれんかうしとき
おほうまもとたりて
大くらおもしつけくなり
伊勢のこれつ宰ておひかる大内記なる人の
花 此みなみ花名あのあし　大内記ハ式部少輔兼つらる貞と右京
正なるもしてにみえぬり
秘 武部少輔とし色こらけて右のゆかりの　介ぎ

みな度にきこしきこゆるうりとまと　必 かりかれてこふて
義 菅公の家人に大納言ちるもあまハ此大内記ハ宰相なんなり
たつるとえらりいそく　義 古人の詩集とも
右大将定信へまれるすなは猶あらん侍や　義 菅公の事と申のうへ
菅氏の事とし白大内記ハ申ひまうこ初なり
いつ紀うく法くなれく　義 大内記定信はる事とゆひて
やさんのさんぽうい為う　義 念仏法花のこ法し
うよひのふるすハよそに秋深うらハ急しかうりもまさらく
去年の秋を深き細紙をへかひし法しおかうりも細く定信へかく紀ゑて
世をなんくしきへさせまつる。　深き世の事し
京よりまいとしきのひく　義 二条の大よりし
京よりとなる紙に白紙そえて給うとし
いかなるさいて井のさんかあ白紙そえて　奈ハかうるかう
きのひるなる夜なうるとなうて
かとうれしくもこうしつるかれと　秘 白妙にひとめしらにころ さう
ふてとひかはふなり　義

しきりとまうりたるこそ　秘 はるかとはるかせんとそかく

白馬みまゐる陣にて　必 大内記ノ朝　箋 弁ハ廊に侍とし

あをむまはらかふらん　箋 陰陽ハ新道の寝殿ハ侍し

此人ゝ今日もて禄給ふらん　必 白馬　私白の朝

あしきことなかにゐれるにて　箋 この白馬をみまて

なきひとこそしきこえて

たゞのれとしあとの人のあまうちたゝみそへて

秘 ゆふ気し　箋 草の中必何となく此の方れりし外のやうとし

かの方々に白とよしあるまうらん　字係の名付とゞめたり

人のそばしはさやうれなるとも人のあまりかとし

年給ふれ人々のとれまひて　必 白ノ草とあるくりてれあるとし

箋 うちむこさでなる名よりハ此さうしらる草の外ハ係

白馬とゐくらうとまのて白れあるて

これ人々のうるはしといはれまして　必 内記ノ旗姓とい

けむれのうよりいかにて此人ゝとらし人ゝと　必 白ノ馬あはれ

まてれのりし人々とゐんこそかゝしあはれし　箋 月

なくまうのこゝ人々は何にし　より係まさ中将の名草の

見わたし白うやくとも人ゝ何とあるハ兼通ハあらし心ゆくまた

此さうしハ久のいろてうとかのぬよなくハ何らん

ひ此よりハ二条の式とうくぬとあやしうとひあまし

秘 中宮より志てうきハいろる本ふれとし

弁 係母は中宮とひとりしまれ中宮にすゝ志てし一所にて

みてれハいらる係なんとくもみてしぬんてとひうこひあまし

白ゆいりしてゐうくるで　中宮の草と間かで

かうしゆくるとる白の所まてゝあはれとし

きてとれとれこの所をあかし志ることなり　字係まさうれ

本し白れあなり

のうらなとひえんあとみして　弁 むつ月の係し

同 賭弓 正月十八日也　清和天皇　貞観二年正月十八日車駕幸

豊楽院観賭射　内射　仁徳天皇十二年七月高麗国貢

鐵楯鐵的八月集群臣及百寮令射高麗所献之楯的諸人不

能射通唯的之臣之祖楯人宿祢射鉄的通爰時高麗客見畏

天智天皇九年正月詔士大夫大射宮門内
延喜二年三月廿二日同十七年三月廿日同廿二年二月九
日　延長四年三月六日有殿上賭弓之由見御記

つことゝもしなとにいとゝ人の心ちよくみゆる
必 親王ハ巡給ふありけりて人ゆゑそてすまあまりすハあれ給
まれ拝むとふたゝ心ゆくてうれしきことなり
義 除目とハ京官の除目と云ことあり其ハ除目ハ縣召と
申て京官の任せらるゝハ正月にハ縣召とて除目ハ
春まて官を給さらるゝ事なれハいつくにも無き事
縣召とよみしとしてさて京官の除目ハあまりことに
申くるゝハ春を歌ふの付合に面白さて見立もに見ゆ
此内記ハのそむ事ありて
暴をも執奏とてものしすくるもあり
いそかしけれハとて申文
もちて来て給し
にかけたりとも
弁 文のはしにいれて申さる
人まつにかけるもおもふ
義 白の内記にのそむへし
私 除目にほうれハあまりの
義

うしろめたうてかかへ
少 低姫しやかし
かゝる宮仕人ハまたるゝけるのうちハいへる人の
義 除目とて人をも宮司わ二束の人をすとにおもて
あなたうちしとありて
おとし給ひてもかいとかしこき山こもり
かなしの時にいたれくしもありてさるの人
義 内記の役
義 京官の時の名の程をも
年をしてよるさひ給ひてもそれも除き給
義 人の志人にまかいふるてもしる所々に侍る人へさまくり
これの事内ちうてまても
私 人のかまものことさる八侍ふたうあるへき人々なる事
これをれもかうけれ拝ハ志りしと内記のかた
少 白のと筆
けりしもしもてかひふてひ
世うし中にさへかきひあり
すくしうちしうく給ふまて
義 白の時と云ふな
ひきなかれしふかう見ずに姫てハと侍ふるハ好むか事
ことさらなり

義人のうらみゑへくるり　此をてらへ申あへし
此吉ニ摂政時方し　此歌ハ大夫の大まとしるす人へしとこそ
大将ハ少々あまハんれおそくまし　よれたよりれて云詞し
むかるゆへにとらへるしとこそもたら吉よ　伊勢のの詞ふよんて在
よかりき世をさて申詞し一様の残し又ハ此しとこと
内記ふよくあるか、さしあかく　内記ハ中将のつくりて堂の
よ紙よくまつし
いにしへとお月しいり　句心ハ昔の俗へうよひきたり来
と見しまか
言紙かくせつてわかく河りさし人のかふら絵かきたる之衣
堂の句云へ中云ど中ちせし時の来とされら客俗へ
つまなりて中云紙中ゐらまし
さはいひてえし給りぬ　句云ハ好色ふすと給ふつく此紙詠
もろこさやうあれと京の内きてさへされらかりまれ世也河りき　ハ
え去かりぬとらふなり
御あそ給しう夏やしうれと　秋　ゑやものしれとし　新河

いりしいひうあらん　必うへてしもいつあまそてかとし
みあまれ所てきてあつてくるらんして
義 句心みさんとおかつる此堂まりの人あまれハいうくふ
らんまらんと言中うはかとおいしうぬし
かの葛の人ふとひさうあれと　義 大内記て出来内と知
称もて堂の家人への出内よく知らる翁ふ歌みてもうる
称まれかもさら沢すゐひあまし八　大内記し
年りてまさ人をそさて給千　句云の事れと給へる
うさ内記のまりてわれ詞し
風よりのかりて　句此播人のかりありて
いよれハさうくとなりて　義 伊与堂の河らしこさし
并 あつしくてりかれ義なり
紀山さとるさうも奥おみて東屋のまよふあり
本下乃うひうちりけくまりやりあり
升とけるつる祥し　堂も人の用意ふうまり
おぬる人サウ二のミシ人へわまり　義 さりきかんとよ屋まり

これはかれまいりみのありけるに　必　二条院とて見えたまひし人（上）義
右近とあのりしとらん人　弁　源氏乳母子　東屋に右
はあるし人へし　又云東屋にて大輔か女の右近といひし
乗かしひろそへまかせ又あふてかゝ女のわらは仕りしと
家居まていつく二条院は本と云ある又常陸の守かあひたるに
ひとはつきさいとあてや　かゝ女　弁　勝ち思しよらす右
されある心へし　らうたきをはいとをしきなとあつらし云拝し
中宮とし源氏とかの末にくより
義　右近と夕顔のよりしよう給へとて
云は源氏し中宮にはおなるなり
右近とりのあまるとて　弁　折し　秘　中宮へし
おとゝめくみとてあり　ゆへにとつく給なり
ここらをみのひなくとらしもえ　くりとそつせられし
ひ　京へもとよの家ふゆくらり源氏はゆきのつとはしこそ侍れ
秘　源氏乳母の子にして右近へあそもうへをんとせつし衣の末し
夜はこれたちさめし　れありしるく　草は律目ることしてあかきん

いとくちおしきに　義　源氏のさなしのこんなき事と
秘　おりしをひろこれさせおのつからをさむんか
ゆりうの月給出きて見るにおもらくひのとつく侍とし
もくひるる人をそれはかうなんと源氏せうとこその心あへいらんして
義　右近をもひるる人にもへうらくはなりと出来行とのならんと
源氏もうてにて後もやそてけらりおなくく使へし
ひ　源氏の前にまうで給りんとはゆうしおとかのさひこそゆう
あれこし色やまれし彼所へはやく張ゑらてけらんし
又おりは杖へゑりし　かつて後をのとゝせあらんとのとやん
弁　又この女房のいひいへし　詞しとりく　あらいひへる拝し
秘　今京へ出のすまは御ゆへゆれ　草の京へ末へまかりく後
よそりるへかれとしらくてさもしらけり　義
此おとこれとはきうにのしまるく　ひ　おとこは母上の事し
こまうは名にし東屋にやそへ母上の此言家にはゝしくまいれしかて
秘　此母の御ゑをなる人に此めの心のもしもひおしらや此お給と云
弁　めの心しのまつしうらいひなしうやこんと語といふそれとも云し　義

なりとてこのまゝしもありてまかりてかれぬかりふりん
弄まことハ此君のさまのこと心得へし　弄 私云まことハ右近のこゝろとも
まことは右し

秘
私なりとてこれとてみんなてまかりかれハおもひて侍りけんと云し
まことハかの中にはいふ此女のこと車へ出しなりけれハありてはさりし
ら綱いひらく母とそうていひすしやあめくし髪のそこもなくてさ更地と
こゝまれゐてこゝのあとさりしと　必 白縫といひて此なりにそ合給し
花 二条院にて白文のあとよりとまいへ入まるし時はとまかり居
弄 白文のいへてさうしさま女のさうし
まりしかのかしのかしとひあつきせなりて
宮れるへしてひとかんてありさ　秘 中宮し　箋
ちうてそれまかひてのち　夕霧の君なとさりていさかひ
あるてもと中宮の若公出来ていなこれあれとものしるとも
しかさりし院人とものあいせく
花 六君のことに源氏のなかにいるさとうて　私此説よし
秘 中宮は母ては女のうとなくてひとりさりす志ものしやうの
さうしらのたかにてしも中宮の母女し

弄 中宮はかたがたにつけたかのこの宮しかゝぬさりし院人かくて絶りやと
とのゐふかきみやりあるとひもかりうちもはそ　云り
花 此殿ハ薨の大将殿やし　必 薨しては今はなほのはとをし
君もこしあさこかりて　秘 うさうさ嵯しくし　箋
つりかしとしれかけるくもいひて　箋 中宮の兄弟かはれるとかひ
ところへそれかし
なよそかりれ志そくにたハあらん　河 親族し
ひ志そくハ伊勢物語にて見え細し中宮とてのいきの親族
まハかやうにゐはうひ　あるへしとも白れとひかりて
秘 白比語の志そくハ親族と弄にいふる親族あるへしと疑ふ
箋 白は源氏と中宮とは兄弟なりけるとなりぬと
そうし宮れあるくたのかうもうれハこゝろかし
秘 これハ中宮なり　弄 あくたのかハ上らうしきさし
これをあそらう宮けふこ后のかれかなりそ
必 あつしおほかのとさし　箋 源氏と后なかるへうこゝ弄の評し
さそくりゆりしかしおかりし志なるとは　二条院にてそのり

しれんのきひし時よりし
なる紙まかりけるへたし　箋 白きあふきのいたうこかしたる
はちかきこれにもことハりにてん　箋 ゆるのあつかし
御車ハほのかけてそ　花ちるさとのくるまよりこれみつの車也
ふてもとうしあかれ入へく　箋 惟光也
ねうしるとひそれハいとと詠けりぬる気色ともみひて
右近かさ使なり
まさきんやうもあけまハ　箋 白き心也
あくなる志くふさみと　弄 とらうしこさし
箋 そハしけなく右近か行けるらし
あやしうあかりしなさき　秘 右近か詞也
ものへこえりまいらりしともかけみえらいひつれたし
秘 白きあふかりるみれまのみ御してかくれゐるなり
ひ 大蔵大輔仲信ハ蔀の家人也　惟光か志りとし
見系図ニ 桐下花ニ同 秘同之　私云今女房ふしのへたちま 箋
白き蔀のまのゐてつきくしくらひなしのみなり
かくられつ　格子れりけるのみなり
たまてていとまろなくおそ許しことよのまこまハ
秘 随人ハ朱まりとしひみるし　弄 箋
あれいうし　箋 右近か悲怖志つる詞
まりとて人かとろか守なと　おろしまろと紙混塞せよなと
かのゆはにうる所数をと　大納言とかの所息仰ひよりひろうなと
それもうくろつくゆへる　右近か心也
名れかうたらきうすしもおとらる　箋 白ハ隋志なりつみむし
なれかあようちみのしまへまハ　箋 蔀のさ御不意隋りて
なりしゐるし
御供の人なとまといのこられたるきこゆなかりひとて
秘 蔀の所供の人たいつて弁尼のまいりて侍るし由ふ申しける
弄 蔀の所供の人をて例ハ御母の女房ハ志りて弁尼なとの
あなてあへ志りひしみや　蔀の供の人たくとこさ気也
なにへ供うれ気うれたる志つねハまし紀なし心と
かく御使とさ使を所らんし志らぬようなて

秘 今案は諸出ハ源切なるをなきさしといへり
さうらう候へはあまきハ　けしきをもしるしをくのなし
に哀の法出のまとうりくれにいふなし
いとほしめしうりし下のてくるみゆりうなりし
箋 二条院をそれなし
かのう人へ乃おほきんとと
ゑみ中ゑくそゑてしさうん生紙れりけふあれおく　箋 中京の本し
深夜はとひのかなうまと云ひ難なくし白へまうとうめんて
くをとらんするのうれと笑んしてなくさすうて
いつまらかとあられるなんして　秘 川合の河に同　箋同
注 恋しさん後さ仰さんいけ分けのさるとさんへはこ渡くおりなれ
いとおふなうしとそそまとおへなれて　白此たとよのあうで
此うこハ萬葉へりのして　秘 白此あふ用し
を 此けなハらやの歌用し出雲れ揺るとみてしう
弁 出雲揺るし大事と白文のへし
いゐさおまりしく物されて　秘 右をとらんしこてはくさきかれ

白文と注されり
なをなうくな夜のおやまうち　右をこのる紙にてこして
とひよらくなおうとひて
とひあらりのうらおなうまあらり　弁 中くさらうをひろさ
ある中へ下りえ乃れなかうへしとなり
秘 右をとひのさんくてとえうかてことひへしくなりとし
あらしうりしみうくなふいとふかう　秘 白文のうのまへ乃経
ひし此のなりし　弁
なふ伝もんへめと結りしといふふせさ病あらんとかうるて
必 母のおまうふてせさ論んとてもひへ乃まうへこと
箋 ならふまうくへのなりし　まれかんてよりよろし也　右をうけ羽
御おさりけうハれよられのかくさこる
とうて此れも注病りなられいさん方なし　なふを揚錆不揺
合揺るしハ以退歳も称おし　呼けのそれるかまとゆやにえし
おまんさうまてもりふうれて　秘 白の心也
弁 右をとうく理をとる紙白のなふあうれはさ

これハ月比りの心むつれ　秘 句ノ詞し

義 月比の御心ひとり年比せさせてよろしよのあさて

もとつしも月のよすをとゝひたらかくらん人の

弁 文の御よそひすゝみる紙いひたゝせすくなり

にくりにもとくすのいとおもといろ色りし

身りきせんあそて　心へし

しとろすハひなし　　その御の分別ハいとかのすそとし

此人へまんよれたへれ　義 任をみせ句の御ふおほしし此任を男の

　祥名宮下所つる後し令鏡て傳へさし人を諧かくこれやて アり

右とといてしこのとととあへよ　句の治代の人し

花 春な人を大内比といふなり

な紙へこハあらんと紙申させまへ　義 治代の人おいても

右をうらみし句の道当行へれとといつらへくさめかゝる此代

ろ人をも清進殿御人へうぬるりとかほと句文めしても本心あく

てゝく師ら博しとも人そのる八治代の人とは分別かるゝすそと近

あらんけなるる紙ゝさこつさん家山河し　必 おもしてそるし

義 仍りとさるておゝめ人の此るりあしとゆるてハいかあらんしとし

時平と行ら承ハ　必 左とは治代の人の中ろそ時平を殿つるし 弁 義

さらんとつるふ　秘 そと人のきしへまるし 弁 義

秘右をうけ清僕の人への中に時平ハいてまそて式の師の題かく

はようしと待人へりるをさるんとつるふといふし

まうひろくかくし人のおん木とての御おそろしくれも

江 勘文　勘当の事し 弁

義 かく人ハ勘当書つ師といふかよ用し人の御いさるるをとらんく人

まそてせとかし文の文人へさてと師あそあそくらて右をつ

さたく勘当ありかおそ後しそれハふもてとゆきんもうと

もすやるおハおそるらぬ清宮と名紙らてもてもつまし八

時平あとりやうふ為りつましみいひくさて去年をえ文の大宮と

なるゆえ此宮を文あれハいちかく方をておしもよほとしまく

此道当なてゝくハもふよしてて諸もしかくろへ出さるまり（行

とのまきは博やうすくりて　秘よ色の序よそあ申しきるるそ

秘 菅をしひあつてたまし

箋 座のやうなるいひなしてよく〳〵し
こなたにハいとおそろしけれ　箋 右中弁ハ傍にてこなたといふて
おられぬ御くきんなとの　みすの内へのやうにて割注右中弁細
よの源氏のおほんけ　うて菓のおとゝ也 云ハ又菓よ
うけ給はりて侍とも　大臣をも心にさせて伯爵なとへ
石山より参ふまうてたまひけんとて　秘 おのおのへゆかんといへる
石山の事と訓釈していへり　箋
さうしんしきよ御わりて
精進潔斎し
必 さうしんおこたりて物忌なとくさ
さうしんさハつりけれとし
て御念ころのさまにてくふ右中弁になりてしとし
桃てうちに御いりうけたまはりて御ハ　秘 浮舟母は信濃志多ノ下右近少将
まうでひめさ御しう　弄 宇治の宮いまた未そのわかれより
そこにあらたな母はうしとし　弄 浮舟母ハまた母とかうひたちのかみ
又云浮舟母は常陸守の北方になりてせしもとし
箋 宮の大中将をハれ母の北の方ハえと常陸守の浮舟の母の北方とて御ぢうる
それはさて御かくれ浮舟母とかうひたちなるとさて白丁少

女いとさ御よろこひて花人ハ中　女ハうさこ母也
む 花ハ菓の本し　秘 かのうき人ハおとろ也　弄
時はまたこそうれハ志あ千り也　花 大ハ白大れるし 秘弄箋
まいりのうへの北の紙　白川人ハ中宮也
ちうぬとゑていとちらし　必 浮舟母右衛門をゆくなとひめ也
箋 うきさ母の経帷をむてぬなり
あらんまくれのまへ　む 花ようハ白文ノ紀
それはいてうへまてそてなし　箋 浮舟の経帷をハいふぬ也
なりひこさうり紙くさうりかう　浮舟母もうちしけるめかう
なりし白川らうあくおうれなり
む人の人へさうり　秘 母北方よりの手人なり
宮の人おもいたしいひなん　む 菓のおもて御まへといふん
とそれハ京みさくうれへおそし御さぬかくれ也まうさ殺
さていてれぬてとし
箋 菓のたくしあると母のうへいひ御りてハ菓の京おかれ家
おそせぬまうくれてましけまいハいてして右中弁と来たるし

せんとにてまくにのひありけれ　寄　右さう女房なとにいひかへたるを
よう色ありけれはさそあはれ　花　月のさかりのころかし
秘
寄　月あはれまふいひるしなるなり
月はさかりはいてさねていひるしなるかし　恋
萬かんさはうしく　りのこゑといまさんとて待くり来にいて
花といふてたよみたりのいてこそて　寄新花に此よりも恋いて
寄　花をとこへよせましきをあふるまの出次てに恋はれるし　恋　白はけて恋望
されはにゆひしうのこれはりしいて倚く
しかは恋にてしそのへあひれく浮舟のたゆみにそろかの萬ねと
さ浮ハよのきよいの恋まりしを　浮舟の中こゑにハ似ておとりけると
大よのこゑはさうりに浮きひとつあ　必　夕霧は六こゑよりハおと
つあるる浮舟をとゑてハるかこひあるとこひかみそし　寄恋
六こゑにあるくハおもふまよしきへをたこひあへこひかく
まうこゑられあるしとのこ　いまさこかうあるとハりんあらうね恋
みさ浮ハゆうりておもほそとなり
女ハ又大将とのとゆとこさよりけみ　秘　浮舟の白をとゑひかりし

つれるてまろうし
硯ひこえよせて
絵あらとうん示おほく　秘　白恋し
れりひもう川つとゐへし　白のゆめをとさうとこし
男女りかゝてはそひめしうるかうとと此をひて　草子の絵し
白宮
あられせよそのほんくもなほ絵あるきハあてはもそてぬいのちありけり　まれ此絵の末とし
恋　と思ひおもえてゐとたこてをまえるれてハ紫てみてこうしとし
いとかうえふへこそゆかしれけれ　私あはれえるはなとしらこ絵てこふ浮
ゆかしとと命とらしうう絵りもおもひる浮へこまふを命りこそ白は恋も
ようりよみてかうん絵　むしてよりう恋作もひの末をとりて
待うりし作さ白紙　必　二条院そての白し　花
恋　井つくうつよいそてのあかりふとし
色浮舟
白とハあけうさうまつしいのちのことはさせてかせとおもりハ　つハ
花　人のむもはんとはんあられハ紫よかさうねへし
秘　旅をとへハ四紙ハいよまへと思あはとえめ命ともにあとえ浮てより
つらんをとハうしふんうら　必　白の色し　恋

私注 あめの下にふるのさこゆあさこのりにたありに名をいふてや
よくこゝろをとりてよく白地のりんをハうつくしうそふして気をまし
いられる人のなかりけりとらるゝひて
えいちぬよと絶りれのふこそ也　義 誰かれふとひ起つるをまとし
よさり京へ往りしつきものふ来りて　秘 注あめのうつくしみをし
よさりといふ九太つ太史 時方 といひく太をも起るへて　也 秋ふ入るへくこゝろを
弁 見系属こ　秘 太史し 出云権寺時方し
きほひの文り　秘 時方の絅し
九乃私とくむつりこさこしおそて　義 此人の中宮し
義 女三方し　白文のねありこさ絶いまし 絶をなのなり
内なとれこさうし絶さうん出来りて　義 言となとやの百てハ
女房時日人生かんとまれねと往つ侍也されの方の為めて悪隠し
さんりしふ比ひりつまらんしかとるん
秘 時方こゝやうふやは位るとし
すゝ海なつきんそうの人とほえ
花もほりハ一ふハかん示の人ととふつやそとしはつりれ人を見るもりし
注 顕證

弁 見証しそしおる人とさゝてらをし
秘 九処れ人しいろつそをはつらりの人まそとし　義 出をも絅し
ひらつらの名絶さんへはるまさこしはせりて久れし
義 注母をそひおたはおをもちりの西へといひあらんれしいつり
ころくしのつらそられふそ
義 えしつらの名のそう庵私の扉ハ
弁らしゅ太をとうるりの室よふ云し時方の女の扉注しと必ハ
てそらてと絶さんへすると云ふはつれり
いとそおらうせ頂らん　必 名つれはあてさハいそ名らうをの室と
いとかうしけるられハ為そくりこさこしてさせくもの
秘 名つのくおつせおりしよこさやうふ為そくりてまつ地をとし
かつしけるそれハとハ京をとうやもひるるなし　弁
気りてさ名んしとすの中れハ
義 京時方絶時方らやあうやうふ太をとうるへは人へりれと　必 太をとう白地は前ふとありてし
そよいうるうんと
気まへ名てふて　中京 女房方うゝの出来し
白地注友らてりとし
さ海へこれをてハいひあらう　義 白地あし甚ハそさき親睦ありハ

句論は本しなりことりよれむつましくもし中にも深心
の色こそてい く こ そて わ まいの うんとされのふ覚候し
世の常とひなりふよるなまさハもちらと紙なるりをとこありさて
志られうらこらまき路なんとさへなんとふ
花　秋の月の光を志ってその人のうへをいとはるゝし　草の露といてへ六
志られ女をうつしともつへさるゝし
秘　草の露の本をそくしとく本をハいそて浅茅の身にもかゝり
ちとこかてこちすちへ一本ゆし
弁　月のよとをよるよりみせのなつしひあいあやまち紙ハをとさて
人の名をとるすみそのやうふ草のこうさちしものをとハいそて
浅茅の上ふか傳すみとこころやまちまうんと句その色ひあふし
　　弟　草の露がうかしまとハいそて句をとうしこぬしおかりにし
こてありぬ所ふ
袖のうちふ兆しとしあのへらんりし
河河うさりし袖のうちふや入ふの世し露うむしわれな紀色ちよ
弟　川舟河と同　　草のは紙ふ拂しててりまり

白玉
しら志つ浪ましつへきの人志れぬ洞は袖をつ紀くうし浅と
弟　常の別よりも何てられあふ思ハれハいそり
近河守
なつらこをそ行とまさ袖ふせてさきこていふふ帝まをとしもへ一夕月そ
弟　一気の穀なつして袖あさ袖あハ帝まく紙えとしめぬとし
志つらひ色ましいかし
風の音もいつまつしく気ふつさ暁ふ　正月まの鎖色しれはかし
よのうきぬつくらも色風しられぬすうすひちして　弟　引ニの月
河　志のて紀んのうくらくしと明けても紙のさきぬくありそは似さ人丸
此一るふ露のふうしとさしくるを風うふ河さ河しれれハ
松宮す帆てこのもてそてよみ家と云り
西をもの色しふうかつすふへりこる歌の山を月ふそくしして
この歌作二人なん侍るのくちふをさうつひたる
弁　出雲権守と又一人丸　　私大内記色也上弁
秘　大内記と呼力とし　弟
昔も此房ふのこしてそて　　弟　中言へかよひのひし本し
色うつりしうりのつくし　　弟　浅茅のみと句のうんあそ向ひ

かゝりし時中宮の御ことゞものゝたまはせし末し
なやましけれ　二条院にて白女の別におもはし侍し
事いみじかりし給ぬ　義　中宮の御おほん給ふ事し
いとこまかにけるて　中宮のさ侍し
それらしくおもしとあんなりし人ならずも
清女の末しそれなりしも中宮へまゐらせ侍りし
女房てかくいりはし侍ひて　奇　文さとあつかひなし白女
此中宮をもかく入のなし
なりこそいとかしこまれ　秘　文の詞し　奇義
いかしうあはれとあんといはてまゐらせて
白のこゝろもかへなりハ中宮をも思はれとも給ひおもひんとし
いとさうかうなん　義　中宮の御かたよりて御心のかハ
なんとし　かりけの末紙をひとくのなし
人のおいそうなれ（？）かみなきハ　必　是こそ清女に年をまで
末のてたひ給りのなし中宮をも其のすのうこうりしさし
奇　其の中宮にいひかうひのなりとえんしなみし白女の

清女を侍り給ふをかしかりしなみて給ひ寄りのなし　義
まじかりぬ末紙侍へまかりやうに　義　中宮の御し
かうこうにつれたるのかりさてしなかれハ
元　中宮と其をもの御のし　必　中宮の詞し大将の何かなひてさて
心かしさ男にもしきなる男に　男の不肖なりて末をといひてり
清より給ひしなしかしきこゆる　義　白女の詞殺の中宮を
文ふ詠　異あかしいしなへこそしなり
人もなくうしかしさもしなまてと給ひ何事
白此中宮への意如ハ類てあらしまてこそ人もいかなると
出とれをこまれうたひおもふし　義　かりれをそれをりひ
おもしなへ何かと白の中宮をうらしなし
色にて清女の御のおもかれと　必　清女の末紙し給へるまする義
まく御のおもかしてなかつゆかりするそうし
白此御中し清女紙なをとさりなぬ故あまハそ大将也かんと
まなやうれなをいとおもしう
秘　中宮の仰し其との末人への虚言なくへしまとし

私草の本を返しくうらし明くてあらしかをと
中宮を御覧して給のうち経をうちかしてを宮にをおし
心をとてしへん拾てるく心の頃に何ことてひかくそらて
拙くしれならさ後ふて見えん見えのきのしのに
秘 式さえ嫁殿の義をさあて草のとりかち給ひけりとし
私白言ふて中宮のりそあなかやうふて定子のりさ
又ハ草子ひさしつもさやうふ心うつらんとて八の給
ととちをとしくおはしむなり
すゑなるへきと思ふ人にて　弄 白と中宮と定神し
時のすもし本式なくさうし本し
私よしうてあきさ日を筆とのうしるとの事に御みせ
てまうし本しされとうし涼あうたれなあてなとほし六
その紙をは給うかうぬ外をと思ひしてきつうし一本
庵うありし此に白かへ定んしうさうひらく男のきは人
れおとうもしと中宮のえうふ心し
れへ見ん川きつうもし八　花うしさとめのつえの本し
秘 白ハ済の紙見ん川きのうくうしゆくる紙さ後くふのほふ
と中宮ハて知りあとくあひしらひあらて
義 草の本紙まこふしくへのせかしらうかしこ一段と中宮八
恐怖なり白ハ済の男のまの心ふおりて之後くふのあうて
おりやおしやとこさんぬきハ　弄 定名のもし白文の疑見んへふし
秘 此ハ白文あまへのいつしまてりんとの定名とこさうしてハえなしさと
白文ふ草の本の定名ゆのし久冊よるす恨ふさうくハえんつこれし
あなうこれうつりさ紙　白文れおおとん分つく人の止うりけるて
こあふのおかつれさ紙　必 大定ようりの法使の羽
久しうもありかう紙
私明石中文の小うの親しう也
のなハ久しとし　弄　秘 二三日の庵うさくさ中宮
久つうこ右大将ときありまつうこあうこふさとて
草もこれこハ白の花り拾てん所うてし中宮の方にせ挑て
なやまのしうまれおえへしまはて　秘 行子の親し義
あゆしもけしすほつれく　秘 あつしの中文え

あやしくかくにてさらにえ　秘 白氏か文也　箋 少君也

引つゞけいひなすこともなきにはあらねどかけて

箋 白氏浮舟の事を思ひて其事しきりにかけと

よはなるのよし浮舟をとらへうしなはんと申し

きいたけしとあるかの詞ありさまにて　秘 時方也

まめ人ともてなし右のかくさせまつるくちおしく

箋 薫の君なきことを白氏右近の浮ひつること〔し〕されば

浮舟をとりよせたる事なきと知りつるひとはかなうて浮舟の

まろへのまとの身に浮りのこと八はかなくしてえのいらぬと

いとほしう思ひしかばこそ八つかみなることされ

秘 いとほしきを薫の詞也

私 かくなるにてとかくのかみの薫の詞ことも

あはれなる人にし

私 かうかのさ浮をとおもふなり　秘 白のもの也

いかさまにひとつにまとめんにかへん　箋 浮舟の薫も世のいひならん

とにかく白のこゝろもいふなり

まして時方人と時方のまうけれどもさまかけ　浮舟の事白の心也

うしろめたくもおもひてのうちあぐる　箋 宇治のさ浮也

なかなかにいふこと紙　白氏ふかし

時方もめしつ大夫のきさはめしきあひて　河 従着（ジウザ）

も左衛門大夫の従者して人々とものさかりの行うつし

時方八もの時の身の浮也　私 時方八右の〔か〕し大夫八たゝうの

大夫時方が友をそれと時方と召大夫とかるし左衛門大夫

時方と云ても荒なる箋おほつかなさ右近とたのむ

右をとりあるく大夫てける人の左とてもかく〔為〕なるもの

秘 右をの料宮し右近ヵ知る人の薫の御供うてさうしと知り

さらくいりてこなたりのやうにと　弄 私右をとうけを浮近

人とも〔さ〕あ人ハそのよしさうし〔た〕れうと〔お〕もふ

月もくもりぬ　秘 正月もくるし　弄 箋

うつおぼしいつる浮まして　白氏の心なりハおぼしこれ

なかうさんとのたゝ宇治へあたらしからずのうち〔ね〕と

大将殿をそうしのとりに〔お〕はしける　〔か〕りけるの宇治へこまうり

ことしは二月なりけるへし
寺は仏なとさへとりしまうて　蓬のさしおひしけり庭にてふり
ゆつりこえたる御ひかれとこまかなる事ハいつかたにつけて
弁浄蔵の経をよみてけるたりけれと
箋 世ひかれし烏帽子ゆゝしきなとこまかなるさいかとハ白氏かひゆ
つましくなりつくいつり
世いさてみえてまいりつらんと
あれたるまゝりしくのかはりさ後　箋 浄蔵の名申し
られハとし法ゐるへくさしこられなひたりけりぬへし也　箋 白氏とも浄蔵のさわ也
花 是ハ白文の事し　白文ののまひします紙とひ出まして
秘 浄蔵の名申し　此説白文ハ法師なるふさひたてなと申の外ハ
あらく経り法し　事なとも云ひ出るに今つく大将の名に
まゝりまつるとさしてハ法師にかゝりてゐなもらんと
私白文の又此蓬ハ浄蔵のあんし四紙云ひ庭まても名く
とおもふのまひくきハとし法らまゝりへまとひもてん
なましかりと浄蔵の云ひ出ましさても此法とちらひ法

なりしへ世蓬の又浄蔵のこゝ世事とゆかのかたいつしおかさんと
名なりかり給へし
まさこいゝ世にさりてまくあかなさん　弁 又蓬ふかき世々しく紙文のあかはせん
此人さへこゆともさらひとられ名ふかく　秘 蓬の拂し
彦つしつかしとおりつるいゝはと　弁 蓬の拂めてさらさんへ之感
いふ世ハまさりていとあそくまて　箋 引云同法々
此名は下ゆらぬのとれつくりいそてとゆそひふ世後されたり
えんなるかくこハさうるのかて　弁 かりての数なるかくは
あかふハおもとりぬへくぞれたもしなりけり　私白ハ名ふかくそらしこる
名浄く浄蔵あくへてえだりしとこゝ此蓬ハ数あるか外もつりく法
ときそのかく所まかくたのりこまうかてさとし　奔ノ箋也
ものゝあへこゝ名のへなそことこれりまさらりのかく
秘 白文あかりハ浄らりめやし　箋 名浄くれりこさ示蓬ハ柄也
とうれあつさゝ浄の名のつくへなそ　必 白文の法本し
箋 くりなハ名ひたゝつりしうなへしゆとなり
あやしうつゝしかしてあり　秘 白の本し　箋

此人よりも心とゞめられて　　かゝるのこともし浮舟の為に

匂宮ハ井筒のもとにていひいひし事を人ハあるを心のうち侍るやう

なれとも心よくいへハいふるまりさすのゝ又前なくらるて

見るかしる雨のさる也　此薫にて見るく我しあへき雨の事ハ

二宮へよりし心まいらせハ宮しかるへしとし

月比よこゝ見ゆりのかはしてし　　薫　薫ハ浮舟の君常に思

らて此りの心をいひしてもゆくしもるも侍るく　哀つるかと

うかし見るなるへし

浮くもハ家の雨ほりくらく猶しう　　　　　薫の詞也

秘　京へうつさんとし浮舟のりの心へ家あさ浮さるるを聞ていふとし

このりハまちかうおかな　　　　秘　宇治の事ハ川をとさ雨あれに

弄　宇治の事も川をさせも侍れて京のちかくて八ちもあかうく

てもさ浮くくハなつかましこさてハ心也

花もみんまひつ也し　　　　　庭の前花あさむへし

二条へみてちかくさせとあり　　薫　薫のおかしく家文此くる雨

ちかくれとなり

しれ人些れしう見かへき雨　　秘　白も京へうつさしとし薫

そ見かこれなうもく色くさへとへもはやし

薫　白比見ゆへ見るなるむ生とて　浮舟の心也

まし也さ宮のゆもけなにえる宮まさハ　　白比るし

それ見るへしあひしもの心よりからいかしこさは猶あるらむ

らへやと浮舟れもひしつらてなるへし

比心をへのかからてまうちらありしもあり

秘　くの心ひたてこゝるさ宮をとこて薫の心もく侍らくるてる

蔫　浮舟の心なれ白文の哀きひらうれてたし浮かなうをかる

とらへくうしてもひく心かくのゝいるさへく宮へきいかけ

なくのまるかしさ宮くり　薫のあるひあらうで

かりもてと見りらへいや　　薫の君の心やにらゆるゆの宮を

浮いまもち此のゆふ浮くられ　　ひ　蒹葭葉にふみてすなし

秘　浮ともまてもこ云月し此上旬の月なれし蒹葭葉にふみてあり

河　涼陽家の注に　二月神し

此　涼陽家ハ晩月とて　此日の月を用るなりと

又真言教にも金剛薩埵と晦合宿此月に月をみんとなりけり
晦日の月あるハ朔日の月も勿論也此義又秘説なり
花とこハきこえし方のあはれえん也　箋 是ハ大かたきこえんため也
またひきかへし
女ハいまより後ひとり身のうきさを
まし来て深かりて心中に思ひあまりてはかなくうし
山のさとハかくれこもりて　箋 深山の紅白花の
此のさとは時節の花に見えん
心中の情をおもひいでしかへし
さもさむさなれはこそたのもしかるへきけれのことく
河 蒼茫霧雨之霽初霽汀鷺宣畳烟嵐之断処晩寺僧帰閑賦
ちかきさまにて深きなれしけるなかのこころのなかのあはれ
みて見え 能因歌枕に鳥をとりさうれしいのとあり烏鵲一枝の
うちの雑歌和漢朗詠なとにもあるいひつくしてこそれ深てれ雑に
あらさるゆへなりしくさうれしく本文あるは月捨てたる也
花 さくれとうれしきハ鶴の川ハくれし能因歌枕の詞にハ鶴をかつて
こさしいつりかさなりのちしと深かりしかたへりしと言はれ

又たつさしれて書し 家隆卿 鶴のこゑもやいつこそ空の
雲かよふ白さへのゝけしき 此うたハかきしれの名所にきこゆる
かうへらまし谷かなの時のあかりて月つきるにもてはまし花を
菩薩をもらひ又思ふ花の美名をもいふとし
二秘 深きとみてより かきしれいつる詞優なるにつきていつるなるへし
弄 大かたハ鶴しきふて八鶴ところえなり河やまりなるてハ思ふへうれ
此さとの庭さうしきつかはりてあるかたし此言の説なりや
箋 あかき深く説といふへうれ
いとかしこきぬへき 箋 深きあの大意に似たるといへり
五つきさへみまるへらまし 必 おもしはるれ三まにしうとし
ねなまゝゆくへき夜 秘 深きあのさ夜
弄 おもひあかりし人へのうらやこちちさゝあかりしと 箋
りよかさ深くあへきて うき身のさ夜かゝる風ならさかち
てこの歌よりし深へきなり
箋 宇治へしのおとさき歌りハこちらきしと思ひやるらむとれところさかしれ
秘 歌りも

箋 蓬のもとへとうちもろともにことむへてなくさむることの
おやかなむハ贈ノ字の心てあるへし
いまうんまうひてん　蓬の幻行まふとれらんせしとし
さしものとよみはおやうさ宇治拾遺ちさぬ物しかさの空とや
秘 亀山て角山て綴る河ま一ハおやうしとし
箋 蓬の心りし庭ついしようこうるへし
心澄もれさ海ふて　源氏物語京へ座てうるハきんと蓬の心
いとようもおとれむける　秘 うかりれ心
箋 源氏のさ海とおかりんなり
おかしい川家ことゝうりはまさりけり
まさりしさうりて三やしいつ家なり
二月の十日のおりよみ川よみつゝてせ旅
おりふあひゆめのまちく　箋 旅杜甫木　林常流後みえへし
また恋ちいとめくるくとは枝うるんなと　叶青東庭書てうとけ給へ
まつ新なるとおかりいつ罰く　白文みなり
箋 夕かかの好まりもしこますうなりのへし　秘 芽子ちし

このころのれいの井あうよ　箋 白氏の林中みくの出庭し
大将人みりのものりんして　弄 白文のれいの井あうり出ろて
箋 蓬の僵僕よりのをむるしてゆるし
河 風とハ河やなりしようゆゆうかりひまうかて
河 春の夜の庭とハあるやなり枝むくこそ見ても孫うやふかなし
箋 川六の日蓬の海し白ひ米毎よりうて又蓬の神のたしのめ
とおやなりしさひようはりひまさ海ともうり而白し
衣てうしきここよひも　必 川六の日源氏のうすとえてし
河 花 さむしうふ衣くうしきここよひりや京を結ん宇治のゝし哉
箋 川六つ日　河とれのふも秘ひそうしき雨のうちゝし
よしもしこそ河まてと　秘 白れさしうらんのふしうりうも
大ならふふてとひあうさ将ようとなり
文ぞ孫うるやうふてはにひさうく　箋 白もしかりの日もとさし
とさうてれ心ひさはうし
あ路う母をりめなかう　白の心よふ蓬の源氏とお法の
ものゝめうしさんはいし

かうし被綿されのこゑひやすく　義 白氏ハこさて母とよまれ
よひつるうひ色なとこゑひつゝみ葉てこゑひ出しつるよしなし
ひしくとさられかくらりあるてかくらん人とおもひさく
河 本人（モトツヒト） 古人（モトツヒト） 万葉　河あめのかりさ枕あるこあるは使ふのうたくし
と白氏かひ称てこえんも心しりく行人とは葉ことさうしていふ
はやみるく君はひとあかうつりしうたにみなとりのとらんとて
秘 先夜鶏とあらうて明寿詩とまうのそてみんてうゝり 弁
義 羽之鏡し詩と献まうし
おもへよし来りまへ家　　白文なり
みのえてあらしほとほとくいまふて川らるまけるこ年もちあるや
秘 此哥は石不審し白文君葉まも池せとり経ると二ツ
はなとい余りなる楽も白文ハあるらしいきされ人あれハ
よさとりく云なとせらし是れの流の白角し荘子ハ時代
のお義しし哥とへとて君對して出るこも数かへし 弁同
義 白氏りて後ふ葉いまて池せし出れ葉の白し風のめひといてり
是荘子の箏法し葉のそうしとまりあてさへせとこひ祢りけるを白

はるは心のおさ泊しぬ方に年ふまトれあるしかるし葉まて苦ろかるひ
さらりへふさうしのまゝ御と書しと
あるなる男はおんふ　　うりけは来といひて
みる心の所知ふみてあらぬとめしとて　　此段葉と奏て云り
さえなうとも
おはやこ年くしなすも　　秘 路辺のすなるへし
おもやこ年くしきハ路辺の蔵のすなるへし　　秘 さしハ多見みみ多かふ
しかこと紙もむいうれ　　秘 白文おほえいろふかてくゆ詩とて
はりおしく毎ととし　弁　　義 白文の所詩のおとしれたりしとへの
ちと所なふかゝらん何ゆくして詩ともはりしそとゆゑあるく不
審ふ見須とし好色ふすところの所色とあるへし
かの人まん所年らしきふていとし祝とろうれのそまし八
秘 葉の衣らうしきあとひひくさうれおろうあと子てハアんしさうと
私葉のおろうかうれそふて称こ海しとて沫とりあく出ひおりれ
まとくりておくし海しかり　　義 白氏は文字須へおくへしうるし
京よはとてもつくくりのこうりとうゆる　　ひ 長の与さハ綺律と

詠みて作まいりなまらし也　　義 友行けれハくらもと云字ふみ也 三こ
まれ乃行幸をまちけるに　　義 宮中へハせたまさ山をまちと云也
いつくしくまいらせらるへきよし　秘 内記ハ式部少輔と諸儀式役
てとりしこさ給し　奇義　私此内記ハ漢月ハいへるうちと公式
少輔とのしるや或ハ式部少輔のまへるとおもひ侍りしやと云り
花 大内記ハ詔書宣命位記なとを筆かき 式部少輔ハ秋業首誡
なと紙に書うつしとる職也　いまてとりしこさ 職なり
義 此歌の漢月ハ式部少輔にめくり逢ひしと云り
はなはたしくひさしあけあて　義 さしぬさされはそれとし
内記も月をすてゝなむ云をうつしあり
おもんとありつまて　白ありて行列しぬへし
行さ侍りぬれとなつと云り　雪と志のつかておくへし
と侍るもあきれと云ひしなり
こよひをつくしさてきれぬへし　侍月のいうよそにて侍
ちんと右とハ云ふましく秋をなとを思のさそて白れおもくしる
此歳しれるひなるへし

中庭のみせらしくおほひあるよの人　秘 後撰
ひさ名てあふみなりぬ　むかしハ奥山にありけれハひあまりし
私あるあひぬハひあるからぬなり
かの原せきみなりてうくいとひぬハ川れと　白あらハ宮の
雨を侍てせんすまするへハれと蓮の山かひにまさらり侍
兵れありれ芝くり侍くんも中くあるへハれハ
此時ハ人へり侍りんハ岩橋あかり侍し又こゝに中一日くりし侍ハん
もろ人ハいつまれハ川よりもひひ山家紙のまへくて侍ると
おもしくりとをれまと時方におかしてけまへし
さらなりてたつくしみかりしかりの侍をれとあまり
時方とハ彼君ヘさいまつりしれハ秋のくらへ時方侍り
なかしさて川もつひへ山のそておそしるし
これいうかしまの人まれんと　右とつらい浮かあといつくへて
なへいまのあそくかりしまふそふし
よう人への宮行そひ志てる　義 あるひよあて氏神したとへて云り
右とハこゝのうしろこに　菅うれさつへひてくへかつくるを

ちいさきかれのかしらかつく　桂をさしてゆくへさへそのやさしく
かなしてハ花散なりさ海ふかゝけりかなや　義
弁 字治橋と云事つきたしかんしう中なりしと書るハ居世かり
の辨なれハく侵ありしなり
法とつきそいふこれかなてらてなしとあらん
うらかののさ海し　むかしのかし
あり明の月をこのかりて見ほあかそてかすりあをあふ
秘 此朝ろてられハ兼仙りのかひしハ二月の十日かりとなりハ衣ハ花
の時ふちれし花とをかうし　此名のさ海衣かうきさなしといひし
時の名り似てりさてやうてはの枝ふさしかれとも名残と詠る　歌
これあんしるらむのうし帰とゝて
河 いまてかつも咲あかりふんるらむのうし待つき花の香もかへさの花
其葉とハ楼将小将との海ふあそようあり　此所まて留さあなる
のさ亦し　弁 桃ふハ河内字とえちかる
仕七承狭の前さ大将 梅小将　山藤字と注せり
されなりしときハ本のうもとさえけれり　義るゆへと物かりしる

たちむかのふ
将のし
黄公此うき
あ何といふ
あかり作葉
ありかし
年将とかり
りんりの板

本の辨しもと川ふかふ　梅たとへ花さ人のなふさ人ハ梅ふ君
ようゆきましとこさハ本　此ゆの名とはれ将かり
われあるへいとあれかれと　秘 白ノ刻ハ将ふ君一首詠てう
法なまもしこさとし
そし梅とうけれんなのゝ梅のこし海のさかふらちこさる山詠をて
弁 こうしものさかけり　読平国
古葉ハ本のなあと紙しかつくうけんとこをといふと読ハ家隆ハ花にあるし
女ちゝかうしかうんたのやうふあはてて
秘 女の身ゝはやうの本ハかつらしとし　秘 朝なくなりあ居り
あらいあらうそくてハちりゆあれハかうしうらん居の枝
ふあはしてとハくまり
近将母 よもむのなしものなをうろしをこのうさ　あそよわへ心ハ花の
秘 の将みさいの名とり　秘 うへりかよさ海なるさうし名もこの
うえの名なりて　新やかしなんとくいつかなふなるひとなるさ海し
ありかうへのさ海　養 白の色顔白き衣のさ海と将みとと然れる
さ海なり

此五葉柳ハ
昔を忘ぬ
つかひと愁
なり云々ハ
柳の名ホよせ
て此語りつ
あるとてかく
ましきと
りふ也
已上非紙

いくえのつくゑをけらまして　秘 白川いくさのひくみん
丑半とけらましのかし
時方かさちのいみしのかと　此所の程へ時方か叔父因幡守か家也
まかこいとあつくしこと　うれしあるあ所の紀にすゑあるし
あ札のりしに君むらさしていまそうれくりて降る
山さとのさ侘し　銀をしのけふなり
いらゆかるかしの帰そそをし
うちとけねる侘といはしとたちく　秘 横まし　浮舟の心し
まなん白紀まてきゃのくあり人丹　白文の本し
あかつき雑となりあころきさうと　あつらしさいきあか
らしらたし浮舟のさ侘し
つなみかのかへとくてかしもてうらとけくゆるせくとあとハ
白文の本ふあなし今六君年宗なとうちとけゆるとてく
めやのそくこみてハなしとし
金うりて待まつし白の帰色ふ浮くしとし
これまへ派そのこうあり　秘 右をとつ刑にくへの知ると増りる　箋

秘 侍従か本 浮舟の心也
ともかりしなめりかし　白川侍従ふのかふ初し　箋 小云同
此 いぬかみの床の山なるいさや河いさとこたへよわかなもらすな
いともくるしかなとひこえてこうり　秘 侍従か色し　箋
時方をとさらしもかりひらく　箋 此所ゆかりハ時方か叔父の因幡
守かりのなれハ時方と行もあかるへし
すまひあきて免ん地もかりしをうそ　宮のりの時方へ下の
うらりするさ侘なり
いつへてえせん　時方ハ白へてかりまりて近者とえせぬ
宮りりハ文のあくし佛ならをとハ云なへうらん
いとおそ絶しうちなひひなかりのいさみ
秘 時方か抑て下云なるし
時方をとりきさ地云所皮にをなるうへととい
人をゐとて白風をくうつひてくし浮　箋 浮舟白文とは侘し
かのへのりのしまへりなかまふ　箋 うかるは本し
秘 一日大将かてかくうちとけくもろひのひとへりて禄くけ

女すはもとなり
二字の紙にて是んてとれて　秘 草の末し
草の末と済女といひさる歌にて廿二字を第一し済也と読る
かのこゝろ也済ひしひとつにハ　私ことのうちめたる草の済に
へ立切たりしきつせしとなり次てゆくこそやといへり
草の衣からきし今夜りやしもし済ひしとらふつや
秘 草の衣し　衣からきて草のもしのひ　末し　并第
いうくかしつる也る済からとのめしきて為りなんしも
時もかふ白の作し　時かし紙のもつて
時もたと代定りりハもとれりひてうし法くと文ハおりしとお
加して女とて用ましくのもつし　私さてかならんとそ也ハ
ろうしく文法うふさ済なりとを定りりにかへしそなと
并 時もを定る法ことそひくりし法くとおりしと思ひて
文ふ法くへるてもつるとをはそくへそとし されてのもつし
この女中のとそしのゝりりして　在左の本文 時もかし
まりけむ者紙らやつものへ事しハ　第 済女の流のうへ文し

山さかしこともそつるかやり女
済さ翔らつ辞し　秘 あけ済さふてもとおり
あとまとあはくそへくらうりのゝ　秘月宮の辞とり山如むみをといへり
白代済切ふ花のさ済なをとらひあしのうて
白
岸の君けの出畑とゝて是ふ花しもんとへらちハまもと代岸
岸の君けの氷ふ芳花しかる花八半の数あるく次済糸
とれりふ仏の切るとらひるてしうし
こなたの里にるハあまとし　も 是紙ありハとならし
山 山塚のこゝろこの里にるハあまとしてをと思へしからありそゆく
第 川立同
近済女 ありゝされ汁ふこ白る君よりしまてふくこ我ハ云女我なく
秘 済女のうし
第 汁本こ白るハ法のりしらつゆかなし我ハよとらつれ白紙いへり
私汁ふかる中なよハ波ふてこさしやもとこさりのなれとも白紙
ふこ白りて清めるりとせ済女もありつる花てなつま
てらふく清めへしとしも紙ありへらくいへり

このなうそく紙ども有給ふ　ひ いつまでとりさかしうく

中やうの君しあへきとれのふとゆかりしり給て宮のとも給

秘 一月あまりぬと白のうらき給ふて　私白のたいへんれうあし

夜てふうへおもしつけるものくいふをとりかえのて

きれふくしもうさらくけうかれ　秘 給母の色し

さうくさうれあんうのひある　白の御さ給し

りのちふりかし　白の御りの衣の生京のあまそて給ふ給ふ人

ちさしぬふこうちいのさりりの　ひ 深井のこきぬし

秘 ここされぬハ紫の衣し　蔵 あのこきぬしこし　私紫あへし

あうひあうしう　蔵 こうのそし宜てこうあし　白うき給し

しひうこさうりしとやさやこさうれハその色とうり給て

ハしひうハ色のるしこれふ給し

ひ しひうへうれ色し禍字也 その裏をとりなまひてといつうさ

色そうれ色の本し

奇 給後うしひうとへてかと給母あ衣ふこさせしとし

秘 裳し　蔵 わさやくハ鮮なうし 衣裳のかくあう?

清てう川まうつきし給　給後う裳をとりてうり神ふ給母

ふこさせのうつく白宮へハのれまいうせのふとし

明まふこれとなりあり八　秘 女一宮し ひ

そのあとかの人ふかんて色うへし　白給母をかくかくさん

狂言ふ又宮のふあてちう色かしうふさいへてせぬとし

それまへ母色れとひうつぬ　白あふけのふ顔さへ言ふ

又あそしとはさうれいさぬを称うまうくしひいて色あ

うちとてあさうくし蔵ふけのうひあして

うらとてもあれそていらんうされあさ給ふとあう秘あれて

蔵 川台国云蔵ふなうとなりし

夜ふるくあくくりのふ　蔵 又あまて宮給へ御うし

いうきうさ母もへを　白のうらとてれのふて給母のい

うらうあうれうし言ふを本てあと給ゆあしとし

うれつさうくおうへ府　うこさ母のき給し

尾てこれなうろうれて　白ハ春宮后宮うの京へあうんし

いとあやもうう　言ようら白宮のかのあうれさ給し

惟光ゟよふこ侍るふえさきのうれ　秘 源氏母への御心人々志く紀氏を
さうしきめの也　まことにいふ人のこと源氏の御事をいひこれにと宗祇
弁 乳母の女也　又云大弐の宰相の女の事か桐壺の巻に見
秘 此惟光の母ハ乳母なりしか今侍りなとし
箋 この惟光ハ母のとの尚侍にはくさの家の事と紀伊守なとし
此母のとらかハ家の事なとか申人のよし色なり
侍りこそれそれハ　弁 尼の事いまさらしきものや侍り法師
紀伊守くるしえてし給　弁 源氏の君と紀伊守くしえさせし
也 白き扇のみえとえしらぬとなり
かくはやしきを見ひと　宇治の巻いまさらさつぬさ侍と云
紀とのりてかしこまりさん侍と　箋 莫の志ゆるん侍るを
まうし母君の色なり
ちかくつかへてんと　箋 此ひろくかくる源氏の母と源氏のうらん侍
ふる心ありこれにそえて一夜とも　箋 源氏の色
かれらかなる人の　箋 白のとひいてよまうさ侍のよしそれ色なり
うちとけ
あさしからなりけんへし
いとしきうれ侍しう見えて　秘 白の御出立ちのとらん様なりしと
あやれかふこハ雨さそれりのふうそ　必 いまにあつかれてのこと
河ちかうちとのあやのふこの事色あり いふきくもさらいてにあやれて
箋 川ちかの所
弁 いふかきそれとも見えし雨きそれとハそら侍らなりぬ色
白 なつかしき侍るそなることの云ともえてめうてかうへつて侍のよひしき
秘 雨乃うちつとそひ侍りてえう色
箋 かうさへくるしとハ神のなつとさこれにきそてといへり
よれいとおりくあてハあつかね　箋 源氏の御かといへり
いとくゆるとそひまさりめへそれと　秘 白きへとへいひくへそれと
秘 ひよりちかうまかひしきぬてさんゆふられハ　秘 莫へし
世中をしらりふし侍なれてみや　うきよめの色
くゆるこき事にさしつけて　白きのふ事しし事 莫へとハ色
めくてくゆるしさし
いはしかしとひまうふあやみて　うさあめのもしのいうし
かはりふまうれ侍世なからんと侍といひて

くもゐにまよふ雲のうへ人　秘 おもひやるへし　嘉
かのうへのまかさんとも　む このうへハ中宮の御事なり
秘 みかとへ参りたまふとあるへし
あやしかりしこれの声のうへたちかへりけれよみ
奔 白の二條院にて御けしきちかくさふらひし時の事也
秘 かくこれをさせたまふといはれて中宮の御ことなり 故二條院にて
かのうたのおもひしりきとよみてあはれなる御ことなりけるを
なれハ薫の京へまかりて御うたをもしらぬものなりと
松よりけるこれをさせたまふはたのまる 御へはしきなく
あへし白のあはれなる御ことなる御心をとめ御事の也
ましてとかくいかさ後のことにつくもあらんを
奔 薫の御ことへまかりよみていひなかりぬるを白ハよく存さて
御心に入まふて女のくるをみて心のうちにおもひて 畢竟薫の思を御
おもひみ給ふものとのへのさまにて　必 一条帝の御事のあるをはらん
おもはしさし
われ人みなし御事しりてまゐらん　秘 薫の事也
かれ人のめつらしき御事しりてまゐらんとも　秘 薫の事也
彼方よりはつひあり　かゝるよりし
これかまとなりて　嘉 白とかゝるの事也
御ことおかゝりけるを　秘 白の御うし　奔嘉
なみかつりふかりし　必 白ふとひ給の御かきふやとまかる
ことりそうし
殿の御かたちとなるひあかし　秘 御返の句
こはいたかみて奔りて　嘉 白の御母后明石中宮也
うらみこの御なのおもや　奔 右近の御返の心をとりて
かのはきさ御母よ御さりのひとへ　嘉 右近か薫とかゝていふて
御この御よしはてゝきさよはうれ　白と右近の事也
ひまかいまの御こひしよりハ　必 御返とりふまいひかりせさせ
はかりかへハ　嘉 白のかの御事
なりひなしは我みなりけり
おろかれ方みやいぶて　薫とおもうなし御方にいふて
ゆりまはなとちの里へいかなんとすれぬなのかみふさてとはは　秘 薫の御方の句　嘉
秘 宇治のまとりはいかり　嘉 あつかへハれ御とりこせさせり

墨田名をふあふ元れハ英公ーあ此うきハいつくもちゝらことハ云宇治と云とこふあふ川々ゆへ庵うちあれハ文字ふ結うしといつる仏元何年申し文なまてさて少ゆきさゆううくんうる外代

白さもさうしはゆてかし　義 うるのみをれなくしくしこさ称し
まりられとへんぬかしみて　秘 白人への比くりといそくし
そふそえこさこゆかりしとちらくひらく　秘 あらうこころさ
みのまうれたちくぬひなあるし
こさうを墨田名をいうりれきましハ山猿のうちのもてうりそいとすさうさ
并墨田名とハ宇治と云心し又まの句にかうしさと清りいとしハと云感こ
秘 墨田名とハ宇治をいふり[?]能の帝よりりゆちりいちしゆていつあ
字好し墨田名とちてうしさハ凡へんうりはしえきまてうさうとい
如感きし此帝新拾遺ふ歌云ハ紫式部とのとり　義
おりへくえをまうしこさことれしと　男女をこさめひし縫し　義
ありかくうさ治へりし思ひを　うさあみのむ句よの詮り
まうけものしこさこともれともおりのひな後
ありれさとしこのり　董ハ玉てまてく句ハ又なきしこうへんて
ともうとししうへんしししたり
白人在て信ぬ ハ乙し晴れぬ罪ぬのあまの云ふうこさて世をとあるかもしておたる
其雨雲としる　一天雲いつまて用くく

義 河まてやらハてうこ云し此云のハ為とらふりるし云云比くしくし松平て
なつくまさらへくこうきとし　松うこさてよ紙のうちの力をとしいふ
浦うまこき雨雲の清海よ紙ふうり[?]なくはありを又あさりやと
いふ[?]へし如と云み字よ冬中へんくあるへこきうくい
もうつ[?]あへんとこさしてしあり紙
に 何とある浪ふかこさうしれまりしつまうハ訛りいふのあへんとしこれのへん
秘 白雲のうれぬる云やふ海しつまうハいつまうて任て見へを離らのん
秘 花あり川云の云云みは[?]うくゆくり河浪川云のハ浪ふは方とあ
きんと云心あまこハ浪まのむふ詳未へり　二首共て用らく帝日
さりとて息しゆ　義 白れのむし浪ぬ[?]のむなしうるし
物とひてわうらんさ海　浪まあのの花に[?]んさ海を白比感[?]後
もあ人をれとられへんおひつ　秘 うれうし　義
董ハ庭うま[?]　つまうくやとうりを[?]ると母のもそやまゆハ袖さんいとしみうさ海さりて
秘 董の在て帝し
に古 うすまつ母とひあのりれとひうつしうりとあう[?]ハふりそ海られ浪

箋 冷泉院の御こと同じ院の心を下に含めり 此とことらくゆる給ふ
細 女二宮也 箋
女宮の御身の後見とのゝしるくの給ふいくに
あやしとりやと見ゆさんと　くるの御女二宮との給ふ
侍りけりやと見さんと勅撰なり
さんなとも色ある人　くるの書なとをりけり
こさとをしなとし
まいの人あけてるしてんと　・まいの人ならて八百万の人の
あゝなしてとなし
くてらをられつけて　箋 女二宮ゆへ世てもむこさくうはひあけ侍し
ありし人母きゝせさりし人のしんさへ　後母のあかし女二宮ゆへ
世の人のやうあるのもの出こさく贈ゆへさりし人をさへ云ひ侍る也
いれあるまんなをくつさ　秘 なひとらうしこさ時を箋し
箋 弄ニ婚時の心なり
内よあしあ後よきてつしめさんなる人や侍らん
箋 女二宮の心をさる本本まてて内裏あ人への何とあふやてぞ
さりけん侍よくあみ　箋 みかをの別し内裏なれくたて

侍りつる雨よりかうしてんと　箋 二条院とうり
侍しきらしれ色こさ　箋 少宰相なれ
此内記か弟の人か本や　弄 大内記か弟なりと
箋 大内記道定の父大蔵大輔仲信也 其の弟へて
こし侍さるく文をかくまたなくゆゑしけり　箋 関侍へく
白文へ此うすられ給しとし
れ後者との中に　後者に給ふ出掛てのあるやう
いられ侍しさりさく　秘 白文也
箋 其の後母をむかへしぬさはや宮のあつかひさんとあれは
よき乳母の心の　白れ後乳母也
あけりられさとを　下京なる所
あいしいてあはしくあられてうけ給はれし
白れ乳母の心の也しよりあつく得らう深さへ物いかに
よそき仕手とりまそて見こうし　物のしとめ給
此あひとうまへ出のふかく白のひとつしけらく あかけれ侍なり

秘　二月し
此月のつこもりはみしかく御座候へは
并　連月あるく作り　ありしくなりけるへし　義
居ても其の日　家の所に成る日前句と後語へ付さんとし
これはものゝ心にきこしけれは　義　前句の女の心としまくし
大形ハ卯月十日とあらん　葦へハ卯月十日に前句の殺さ出さん性
さそふ人あるときあらけれ　作者ハ男を作者の様として
さそふ人あるをいふなんと秘事
秘　葵の男へ弦と前句へ(さし)へ女なれハさそふ人あるいへんへ今も作者
義　又自分のすへも志らぬ心の落つぬとし
そのゝ時りとれ志らしもをりて　古詩以下につけりし是まて
前句の心中に定なる所見へしより　うこさ女のいりうの常流々女し
少将乃かなしむへさふと　うさ女の女の宮仕へ事りなるとし
女そこちよりのかゝる
めの心いくさかく衣よりみてのさうそく　まつか女にかへるとし
葦よりれ衣裳なとの来　作文しさまさ名をとらえし
かちよりけなうそひんかなみて　前句の心中し　からちよりけれなハかの心

うさ名なり
きしかゝぬまゆるとの　秘　句よりはましかうんとハいとみきまつきさとし
句のとゆへいらなる来ぬおこらんとさひとうてへ前句の心中し
あやふまれのゝかへ人へたまこ　花　是ハ句文の作来し
秘　句れらひみてハ川くまてを露のゝ御座しとし
八重立山りしこりかとて
作　旦やさ云れ八重ふる山の答に女ふ正もハ位ある世ふしてありそれ
旦やさ云れ八重立川山ふこりをふとひあちなは露のさうかや
後のことれ公兄なと作
義　市皮り云り句の下に付いてり前乃川山後のことふ付へりみこれハ
句文の前女れのうひとこそ多まさ後とそ野一旦しさ女代句へ
かくれよりとをいつくまて露女御座しさまとてあすていつとし
此句ふ井なりひさ衣くかゝさまてのとの後へ念かさすれなるとし
又みちれのへ名をと　秘　句より今日作名の名よりしハ名しうん
なりけまさてはさ　めくみてそらへし
私此前の詞ハ只今乃句のらみのさ後そいひの人へ名なるし

なをとかくまといなくられ　源氏のりのとふに右を世にはるゝ世
あやまりし事あれせさ罪のゆるしといつくし　まことかとこ葉なるへし
こさら世におひにさうれ給ひ侍るし　秘 月のひ懐妊事しまてかとゝへ 義
いうるほ御むららみしこ人と　秘 懐妊のことハ人々ゝれ月出
君にもと侍りみてさうとおほし
さそりとて人にゐなりも手りけれハされいらし　義
弁 源氏のなやとし給ふを懐妊ゆゑし世のとふりしかとも又月のとゝのふ
たちはりて人に語ること侍りしハなしあるぬまてハ有れのやとふひ 花
秘 云かくハあれしと月のさかりゆゑハまてぬれしう
おもせしゆくまに給くりまし ひし　弁 うちさ世の事し
かきりうけまいハぬしめし
義 又白れ事あやしとて云ひ出さうてや
秘 月のさかり事きの事なれハなさらへし　秘 梅のうらの時の事をも
ゐ夜の事をと云ひり判あること
おりひいてまて　義
右云ふひいらく　義 弁花し

こひめくのゆゑにさとの　義 大将の事し
さうへいの事ともも見しいまそるらし　何事とも源氏の
ともし右ふたうおくうせるひとしいふかやしかく人のさ
なからぬもありしれいつやしことは大将のるへし
おもし御さまりゝ　必 弁のいふし右姫のおもし御さまの
うへしいて
またのうへなきとのゝやうに　義 中将の事し
ようむもとれハとしへゆゑ　秘 世の心し源氏し申し事もこそ
そのよりなしさくせのおもくしまさてハ　義 くるの心ハ
らんをも中にひゝにあるゝいて世のにもとりへなり
物語の見ことひしまきしきのさとうしすゆるひて
義 うさ世にゆへ世々ゆるのとのことひしと葉のうして一さ
世れひろまとうしゆるへ事とし
くいうりなひゆへくぬれハ　源氏の京へ出てり事し
夜にしもりくゐるすかたのほしもとまうけを　義 夜ハ守治
秘 京にて源氏の出るうし給ふゝ夜にもありなすハ名なうしと

世をうしの心のとくれ　八宮大君なとの事也
秘 弁か詞　箋 弁か身のいましきことゝ思ふらし
こゝろやうなる人もてなしきこえてはせんかたなくおもひくらしこそ
大君なとの事をいへハ弁か身をいましくおもひ
浮世にそむきのこゝろしくさめりしをいふ　弁か詞
うちすてゝまいるをうひ侍りなん
箋 浮舟の京へまいり侍りし弁か旅に出しなんものをといへり
かの侍ぬハひとりとゝまるへきのし　宇治の里はひとりとゝまるを也
よをうしとおもひしかともうけにもまかせたの
秘 薫大将そうらん中のちかきをもとし
箋 かゝるのちは紙をもおもふれえとしこきて紙にゝて
おほろけならしとこゝろにとゝき侍るに
弁か尼かうつろもちきハわれらもはらしとおもひみゆまいて
うちすてらるゝ身のやハ侍りなるとて　弁かえひ捨し
うきさめの本かやんとやみなり
後をあしくねかしくもいまのそて　秘 姫の詞　箋
秘 姫の事葉なかれし早下にしていへり
あはれなるきぬさ侍よ　箋 薫の浮舟へ忘れかた
身はなへとなんつひ出こそ侍る　箋 弁尼の中に
忘るゝ紙ゝかしくとふて母の詞なり
宮の御かへりのうけなくはそのまゝに見えしくおもひしも
箋 中宮の御をんはなしにおもひて浮舟を二条院に忍ひに
つまりさこそ子の　箋 浮舟の二条院かくされ侍し　いへり
所台宮のおほくしうりし事し　も母宣あすハなし
中そこれ所をくれなる身なりけると
是ハ浮舟をいはくれいとうんと母のとひかけさうし心をと云
あはれてうちつけひとく　箋 尼君弁し
これ宮乃いとしきりしきもあらくなるにねくもなきあまハ
秘 匂宮の事し　箋 弁か詞し
ひきせめんとさく　あつかしくぬるれ女房
なまんさうつひかくうへしとなり
大将そいとほくかきさんくなさ侍なれと　匂宮のいそきさ侍と

秘 中将よみたるかゝる事し 弄
箋 中将し白氏よみかなひさう
さ給ふちの本すみく
うへのありしおかさうらん
てハ中将のおしくおかさんてと紙いてり
まうふかむもとの　大将の事を中将よれ也と有し并ふと
さりやきうしてとつ事ちこさしぬりしのてり
事ハ給ふし中将ふこやつふ女房なまと紙さんへくとりくふ
いろ給ふれ白氏よむへらまてく京へおくらしもらんと中
ことの時ならくりしそふむしやうの本すみていろく
弟紙をそへんとそれありのつきめへし
あまさむくたまやみうかしのたむせとるとりちゝるてまつり
秘 母の事し女二文かうききまりなるかくこふらむともぬくとさ
いうれうすハおほ京とかこさ本としされとこれハつきとゝられ
ますらすなれハ事中をしとし
されとようそくかそおしくとようのらんハ
弄 蓋て女二文をち給つま本て 紀への事なれハいうえと
秘 白氏の事かへらうゝるすハいさしかとゆえうことし

白氏ハくへうり名のゝ本よりおくるハ母の事中にとゝある
くともふとよとけいうなれハやうけ給ふとし事し給毎
みとひこうれ事し
いひうられとし母紙
母と弁としりいかゝし
みとむこきりつふまとめ
秘 うこさ母の事なり
れようむをうしあひてくゝや　うこさ母れらやうのうち 箋
やうくそひてくゝ本し
式部乃あとのよそ給ふしもこに　くやうふ給ふ母の事ハ又
はとくろ部しし川ありよりのわくこさるまへし
そらぬなすられとそし　・弁 母れと事し 箋
これみれあくもまりこさ示ふそう月絵ゐらしのらひと哀とを
作しめへこなてさされなんなと母え志ふり吹わにいひわかり
弄 弁尼のうへ示ふ月をとるうかうとあくまとこうる事知
くわし　式義示雲　秘月と云ふ式義見え此と弄
秘 弁尼のう給示ゐり月をとるけりをあへれそしるすゝ事知
くわしと云義なとやゐ正にこれハあうるむもとめ紙へしく定れ意

はかなくときのかはりしをむかしてれはいふかゆへし年月
とかかなりて前の義あれとも今ハくらいかん為まに月と云ゆへ
私秘義也おりしはし母をうしなひしにあつく思ふまゝ
かんは是の儀懸ともあつかれしてかへされぬるに而て
京へむかへりかんとゆるハさくうてのへさることの母れ云
やうなうときてうりうかなりけれはいつり
むかしよりこの川のなをわすれしかるうと
此川まて人のおやまちきてうちするところなくいふやうに秘より
うさ私の書きとうく庵てさり
さい川此みつしゝ守るむまにこれらハさんすしらうてあちへ入
花日本記云大守皇子随先道河而没故云
みちや人かちのとをうりに棹しりにたるかん七ともかれにきん
秘　おそ彼しこ而といゐてり花なるふしゝより
いさ清しふなる人へとかりか　　寿　花にあり
見てさそもこゝろあのしりまて気のりん　海母のきし以来も
あるはしハ月とあるを彼名人へ仏なるへし

あれとくしまたうしまて　　かりゝ白命しなるへし
なかくへうくへらへり　　義　幕として白れらハはまかくこ字
出こんとしこれかくぞくハ月とまとこん八一日はゝする故ハ
とおりかてし存命して八そ乃云ひ白のかもしこれと
うちゝへしゆとかれし　　これハおやのように川にとひと
さ海とといつ家詞へつけくかんとく彼ろへさき
補うるやうちて海くくとえひさうり　　海母の名中し
なかやまりきかくく気をあつゝ家とものゆゑかていたく
海母のあとこゝへかるさ海と母の乳母ふいかて
こうし河ふこゝそこさせあり　　字まうと
河　立まし心こゝうし河ふせてこゝそ乳ハしけもて故り流しる
む　立あへ母りくなりやむしとかるへのへハ氣かゝれ母をえ乳母ふそをえし
秘　白文のうま歟して
義　海母れん申して立まし氏とてハ仏母かうねうするをとりふ云し
条々桜としりかゝりと云ひうまるり　　私此海母のうまふ紀代のうま
なとえ立へしこさ比しれなてそのなまといつ勝かゝりくたしのう

よはひ出いつまてて桜川なとて前表に残し　かつ流して流るゝ
身となりぬるなりとてこひしのかなしみをあつかふなりし
人もなれなりけり　これよりうたゝ見れ詞し
秘 京へのさふらふつ事にて人にもなれぬとてはべ人へおもふえつかへ(ことし)
箋 母のいひやうし給なり
いまかりけりとて給ひける人　箋 いまだ京の心ちぬ事しと京へは
給ふらしのみまゐりしことよとし
けふしこそ行けるを　其二文のかはらの行いてり
弁 女二文の流れ事とはよていかゝあまねくなんなりしとてよ
うれ中にかかくとは流くの人のやうにかつゆかず志いとこ
しなんとてつひきよりとし
まつりしきことを母
いとそめかくさうなし給へ　箋 ほとゝ人の中にあしきかかりいてくるとし
潜しいかてりていて身まゝ侍ることに経へし(とし)　一ぎゝらしひそめく
かしこれよりつひ侍る人へも　箋 隠潜
いとりのあたりしく　秘 かへるのさいの事をむすし
必 うしさうかし

みあひとてもとよそ心にこより人へは　箋 ほとゝひさしともてなしのみそゆへて
ゐらんあやしう　必 うきさまの詞し
去りしてまかりこ侍りし　弁 うきさ母の詞し母はほ人へ(給あひさ)　秘箋
さなんとひ給まてに　秘 母の詞し
うしこそいとのさかりし　弁 かへるの事のまうむひとろうよりとし
そうれおことかそとえらし侍るまし
秘 京へ出の子へいとなしとも母りこそてかへて志あ人へうてさとし
箋 衣本しとうらゐし侍りのとも母去らくあまりしこそとしせく
さらしこそかなれとし
たとふるこの身ふりつ流ひのふるを　必 みちのくのこ
みつも流しとあやしは申されかあひの風吹きさきんさらや　道口津
弁 催馬楽見河こ事はそことあやしやしとうの詞あまとはいらくまか
りし内よとてあやのいひたる詞し
つらあらしもしてえまいる　催馬楽道口のみのうしい
口とハ越前国式云し心あひの風ハ世の名あへし　松動催馬楽注云道
みちのくさうとへハ海といふらしきんさうとハ云まて万葉に

宮の御の中にも都にさへかくさらみ母に似てといへりさへ
しや憚しいふ詞也 或抄にハくはしく義ニハ清輿とあり
箋 人かひの仮なる也
ちひろくにありしさまなんとを 河 みれ母の思ひてハしまらんとし
なはくしきカの様と 秘 カのまてなりしきし
箋 受領の妻なる紀母のなけきいはて
とのはみそてみてまり ・ 箋 けりつゝりのみし
なやましくこそこゝろりし紀 箋 清母の頬のやうなる紀のかなり
こゝろかひとひ給る 秘 みの詞
よそこさの仮名りもありし紀 秘 此るみそし母へ
母れとれありしゆへ夫にそる紀しまりぬなるへし
いつまてはしみしうそれの仮の仏のなひん事をうしろめたく
河 うたかふかひされりまことにあれりて女の徳ん夫れは
清水にあかの立ち御徳紀に伝わりぬまたは紀氏こそ紀り
弁 しかるくかり女の伝 私一すれさこゆりあへし
箋 清御くかかり仏をいらし紀下にありしかり

西のりしはこまかにひろわりしはつかひとて ひ もとの仏のまし
秘 まへのしあるし使なり 箋 この使者し是ら白まらは使紀
とのは是いそらん
とうやんなるなり 花 少輔ハ式部少輔也
式部少輔ハ家のこく 白のしるしあるハ式部少輔大内記兼 秘 大内記也 箋
箋 式部少輔ハ家のこく
官也式少輔ハクりるのうつの仲信か年也
ゆりとはあかりにこれをそるれくしまるそというふ
ひ 文の仮使ハ少輔りとかく常にちるりのしまうとハ莫トぞ人紀
すうる詞 箋の使男の白の使をとうやんなる詞也
ところかふかふ御へこさ 白文の使の御しるる詞也
私の人かてえんなるみをかとうする 箋の使男はまこいふ詞也
宮にしこさるゝ御ゆうとうか 此宇とかさるハ御とかん不審
なるかとこえんなり
秘 まとはこのつれ是のとみて 花 かれ是宇治也三位権守時方也
此方也出る三位権守の使とし 箋

弄 出雲権守かみこといへるは時方ちかんにさふらへといへるにや
これもひて　随身ともの前後きこゆるとし
さのへ気色りぬ　薫の随身も白に使もかへりみる説にも
わつらしきりのかく　秘 此随身も 義
此随身白の使の小舎人にみえたる童裁合の使に同つけ給し
てけこしかし
大内記の家司のやりしと。　花 大内記まて時方か家司にし
弄 大内記ハ則時方也出雲権守時方と見えつる事へし時方し
大内記まて出雲権守時方と見えつるし
古系図あやまりにて此をは時方か家司かともいへり大内
ちひとり一本なしとらひあるとさ本し　義
なりありて式部少輔にならんよそハとしてせうしつといへり
白家式部少輔ハ大内記に薫の随身の旧仕ふとさへる童
此人ならてハ弱なるへし
さてうちみんりのときさようのきこんハおりりん
薫の随身よりも白よりの御使ハ御下家のおもなれハ也かた

とおりの人へりかへかつはさまもちみちりもそらちもやるまなや
義 さまさくらのんおもの心いりかなりこて候らくふゐの説し
家よ気色そしていうく候らんとは也　秘 六条院より薫の出家ので
秘 家よ六気色りて八薫の二条院家の下とも六条院へ気かりので
六条院のさ侍いの家の出させすかり　義 明石中宮六条院へおもうで
御所まかもあるへくりう　義 宮へ御の出左ろるし
随身のりようしへの気候候て気色ふるし
おやしきさこの時りう
御本ねとわとえひのうよ　義 くわうの何まかで
むかへりみこそさらんとたくさりしと　必 ゐ紙丸候ふて
随身かはし　目意也とし
とのてきつらしつを候らく　秘 子細なりしと推しのうで
くわうの随身の気色りつらくふらつて何かりかな
ゑのきいわらく候なるやさしきん
弄 中宮の本し　秘 明石中宮なし 義
そやなかちもちから気色ものへり　今上の女一の宮なて明石の

中宮の御使なるへし
是内侍ハとられてえまいらする　弁 御使にたてられたり
河 上使ハ致官したる致仕の被官なりけるし上使とハ云儿字に書なるへし
秘 致仕にて詔書宣命なとの事にひまかりし又武少輔
なれハ云檣に候なとゆへにまて来るとし　箋
此ハ見えてまいらする　秘 守信よりいれるなるへし
又ないたれり　箋 文ハ句し
秘 六条院の中宮へし明石中宮中宮なりしまいらす
いしんとしる為へし　箋
大将のおまへの方より　必 中宮の御前し　箋
箋 大将ハ夢し
せうらかえりに行しかは御事の字ましき　箋 句のたかへなるからん
れうらんしやうし夢のたかにしせうらハ柳し
雨ゆふかまくてつんなる　うつかの立なりてこう称めしと
此あとは句のこうさつのかなり
これなひのうちやうふこまうやうふ　僧母より見ゆるのさ侮し

れいしもなくてことに御まへにもまいりたまはぬハ　秘 夕霧し 弁
ことさらハ我のまへなり
此見えてさうしよりいてたまふとて　河 曹司 府曹司
弁 曹司 河海に曹司とこそ侍なれ　秘 曹司とハ云人住む所侍るし
おもしろくのへうちもてなしてさまく　箋 句の心うんなるみこ夕霧
みちをうしとて曹司の内より紙むかいにまさくおとろしかのるにいら
くまいても月ほとふるへなり
れんのさとく御ひきさし給に　ひ 衣の御をとりて休息し
御子のおとし紙しのうつく御をさしあへるし
秘 うちそけるまた夜とひさ給く給ひくなるし
箋 こもハらひとつの事し　句のおとろさのつさ侮し
又ゆいひかるて
まうて行りぬへし　箋 夕霧し
御志やさまの久しく　秘 夕霧の句
おもしハらやをされけるてまつり給ふく　非気し 明石中宮の御煩の様し
箋 夕霧の句宮をつまはりて退出し

あれへまかりまかりぬ　弁　ゆふこまかりけれは人へなり

夕顔のまよおかりし　六条わたりのうちおへし

これらのはおほれくさのうへ　秘　かりそし　六条わたりまうてなりけれは

とられなり　私此義ハ此説より退出の義也

惟光朝臣こたへしつるかのやうにとおほしけれと

箋　随身への使の人し

ついせ前駈にありて先に御身にてはいへんかまかれ

随身の前駈し先をれハ松明のやうし明に申出より退出し

随身の使人の随身の使の惟光をめしよせて

宮のきこえしかる筆跡のて

秘　それ間なとそ

それこそ人の随身に　先よりたつる紙　惟光の申詞し

むつかれのうちやうてさくらにつけたる紙

花　桜とかいはう紫なれハうちやうの紙にてあやうきやうや

とうくつ人ちいさきよしの紙の御文に　紗前様の人々まいりたる御返し

ありやしておはして　秘　かりそし　箋

それハみなの人々　惟光のこれハくみなりしと申詞し

下人の申詞ハ何とあやしこなし　下人ハ月付のうちにて

箋　随身の申の紙の名し

あかしあやしけなるまふなる

白紙しのびしみなの夢の御おもひあはれをまふなり　箋　中宮の方そて

さまそてありそつらんをかくしとおりけれて

随身のむすめ紙をとりにと感しのふ心をちなるや

人よまうしとしき御なりけんなまふかうにて夢のふ

これもこうかうの月夜なり

名をよう代ハよそろし・夢の月をはなき代を夢のやうにおも

あかなうへかりあやうしてかやのそらのゆくの葉ハ

箋　随身の方目合ふうくそこてかのくるしるハ夢の名は月方とつ

ましく清像なうんとなる夢のさひなりこそ心紙おさかし

とゆりけし　夕顔をちらと仕様を風流の方し

さてもさやかれなりけりかまて　さらり夢の月なり

おやしきもろくさのへし　箋　中宮とあそうら随ひし

かくはりこさなりしたまそて　是ハ宇治のうるひ乃本と云り
まいりにけるのことば
中納言へは宰相のむすめをさしたれとまた心よりし宇治　秘　中納言の本し　箋
それハいまたしらく　箋　中納言宰相のをひかしなり
相なりしなる所へなれハこといへり
堂てたれにられ乃后夜にてんり　秘　内着不といへり
箋　中納言ハおとりの宇治むの弁又たとて為へ一本まてきて后帝に
まゐらんハ口細しかりて本しとの前より宰相をといひつるをるゐつし
ありるを今しるつきはよら[illegible]るにかるまをこなり所にさかりけり
なりしにへさふふりてそとと白紙切ちら母と画し紙ら板ば
ま人ようしてれみてかきえしてられる人へさいよりまそと
云下へおりてひなりしと意をましといふたるといまてくる人
しそへし宰相のたとをこれをるとこふるりさたし
あの院うなやまらく　白き衣の此比なりやまらくあそし
てれたまひの人なくしけさとし
おらしやそ洗ふ久甚し　箋　宇治へるやら白き[illegible]ひ御うへる加と

こ路かれるまさうの后　箋　宇治へきとこなるめし
おろし所に河に板ら出まるかて　箋　白の君ら行るす
きしとといひおくぞ所なし
むしとおかしき出るるにをえおそを作りしかるのなかけ衣
ひを白代着中宇治折りとへかうひまろひし時の本し
箋　中納言へからひ御あひし治え内ろせぬ時を白き衣のかや
みなやまうしつきめひし叶とも志かになれしとひ合まる
女代いとりのといひるる　箋　宇治母しいつそや宰相の宇治へ
おろせし時の本とといひ出まかし
きるとれりのたん人乃ためにて行る衣　弄　よれ人へのまとるれるく
らうるけふよ所としのなりとし　箋　宇治母代のさ内といへり
これ文のほうくみてくハ　は見し　一見れたし
秘　宇治母ハ白き衣の俗見みて緒る人へしゆかなり　箋
ふひも板川うまはつく　箋　宰相の白き人へゆうりて者せ夜用し此
時くむちしまへと　弄　ふ紙のくなるの后し
居んてとかくいひたるしかし人へなろハ了此と行く紀

秘 なき屋なりとせんかいとてさうとそのへきさえし 箋
弄 本意なりとせんかとおもひしかひなくなりて かへすかへす
さかりのふかくハあはれなりけんとし
かの宮かたのひとりのみこの人のなかなかのちのひとことさうしけつ
箋 源氏たち葵の上なくなりてのちハ必ずや宮の御かたへまゐり給ひんとし
白氏の物まのみかたになるにつけておもひしきこと人へおもひとし
一品宮の御かたへ二三人
みさかりのせさくこやつゝかせ源氏のひかりや源氏かとり給ひんとし 弄 白氏文集にけるう人とも一品宮
秘 箋 宮つく人のおもひなかうへしとし
白文の一段の御師一品宮やかみひんとて二三人さかりのせなかしも
御いなかりへし
さて出てこちらなきんとかんしめさん 源氏君本文し
秘 さやうかいとまかみ宮つく人出てこちらなるとおもてハおもかるへきとし
さうしきこ候ふしくて 秘 やうなかいとこうんなかとし
まいりたいさんめりて 宮たちへたてひれ給ひし
こちらさこのあそんハ御仲納言か御師なり

秘 箋 葵の御はし中納言ハ葵の家司し 弄
右貞ハ大内記し中納言の弟し
さかん給る 源氏か元若し
宮源氏へハ右大臣やうさりんとれこはせさらん 右子の詞し也
御みつひのこと のこし
こちらさうこともありひくらんし
みくれまゝし道貞も内記なり 秘 まさにまことさるハし
弄 道貞ハ内記のよしかへりくるつひし
人しらぬくことまかれ 其さうしくゆきさとのかて
せうつのふたとのこあるかひ 或説少輔し
右貞さ 中納言の任さんさて葵の内方なかとつひかの
とおりひかへ侍てさ葵へハそこりて元中さあるとし
宮さまのかたそろう 葵の御弟し此源氏にようく
みしつかまてそちもとて名たしくハ何事ならぬとし
かつこれも帰つひのまいらりまきこみ 箋 宮給し
あそふことさ侍しなり 白文の本ゆへ色あらり

人こゝろのかはるましき事なるへし
かはる 波こゆるとても末の松山の松もかはらんとのことといひてかはれる
花古 つらきよとかくかはりし心は末の松山波もこすらん
秘 こゝろをそむかんとおもひしはおこるましきことゝ
松まの松山乃本哥にまさると申

哥 此哥はあひての後の哥乃心は
人をわすれをまちたるなると
ともわすれかねたるもなりけるにまされし
秘 まことにいてゝ　箋 逢見て後おもひはまされと
むかしはおもひなかりし　うしろの心のおもひて
ほのかに人をみてしは哥よ　あひしてもおもひけり
たえてあはれみてはおもひしられしあとにまされ
秘 逢の奥まても志てあひてみてそ
あひてわれおもひてしぬへき人
箋 わするゝのちはまたこれをと
まことにしひとはえなりひのつらきとありおもひとし

はかなきの身ハまさりけん
秘 うしろめたきのをと　みとももいはれこさるみと
なくてゐなしなかなかを
右忠よりて
わりてさのりやうふ　うしろのめのこと葉
あやしとうけまハみちかくかけく　箋 右忠の中
ふくなきてうらみし　それにいふ心の絶
うらみの右忠かさなるやあまりておもひいふく　身の絶
秘 みなとをあまりてうらみにりしれ乃かさてかとし
箋 右忠かみへつるとハかさらくはやは絶りの御心詳して出り
あるいはましくるしきれとよれとも　右忠の細し
身のいたつらの事也　逢の身は本身をりたるとや
よりくさりてあはれとてのとれのうらん　源の身れ拝し
これへのあはれそこうらん　秘 伊尹も右忠し
わかれてそ知　源の身の年も右忠けりにてあはれ
たとへ身の心こたかるく　秘 右忠か常あへ遠くさく
あらしけの果なる哥へし　哥中し

秘　よても下もつかうまつることなき事　弁

古くとおもへるのち

おとらぬ法まさくハ君たかくそへなし

女なといまの中かいまのあこてなかゝせ

はまいりにたちさくなかとし　先まの娘まへと殺したるとし

今のとハ古めやてしおもへし　弁　此事なりけりより夫婦

さてこれともすし侍ら次　離るゝし先まの大将の婿と離れしたるし

あらう法くりの　常陸守か郎寄かさめくてもめの古事

秘　いまのまなりも給さまくなるし

ときゝらうとう　法まへと殺したる料にようて代々

しるりくしうこ人の婦れ本まなり

くはれやまちしたりけのと　法まへと殺し給はまて

ものとたちつまてあとし

まへく女のあいくしこさハとゝく　秘　うちこめのめのとのあやし

ものしるみこひなかまく　退て　弁　古をとか婦し

花　またハ娘女のわかのまへと云もうへしハものとしいふや

与うさこめのつきれ姫君のこしこ　大将とかわめ親観かやうさ

大将かわかれ女のしとの本くたとこいつましうちて

秘　此語らの義不審しまてハ法め母君れ乳母をといて古をハ

法めの姫のしうちの大将とか婦ハまことか女し大将を用しらめ

ねしこさ法をひらく　給まとし　此法をいまおしこさるあれて

らふ大将との詞し

法いのちらまくハ法かれとのくの拾くめつこまく給うなるなり

志めされまさ給たちなりとても　葉　法めの命本これと取

ハなくとてをとりたる能厚もゆるすゝし

まてれひさし海をうてまちやかねふ

葉　白妙へうさふめのひらくしと思ひて古をとかくいふし

さへうり人のとおひいらくさ　秘　うへハ法め母れ母といてり　葉

またこの事いそこさに　またハ法め母君姫君のとし古をとらいふ宮氏

いそこさハ久分うへらう経ひのかるし

されよりこなくかくし　葉へとこうりまうふさ紀にも白妙て

いまのうり　秘　侍従し　弁　葉

うることをさ経しきこまてみ　侍従か詞さゆうふ理とせらく

はらかれけされそこさこあをとこりてていふ翁し
いくやはとくつけるく　義これより八句半と侍従いふて
人のとりしいそくありしまれ忍ひよらん
花大将乃むかへありんとて治めのとみとのいそく半をといふし
義侍従ハかりるのまへ忍ひよらめし
あさいうしく先そてこさこゆる　侍従か白きをとをとくいつくえそさし
いさやたへとハとそをとくてて　・又たとらん御申とといふあり
大将との治そらけんて　侍従　菩の知行けんてし
いうしきあそうののけふて知らかい　御不調　一類ヒトルイ
義ふてう　ふある　私不調ハ物細々乱猥之義祥也
うとハ秘りといふりのゆかりうきうて　御内舎人
内舎人帯劔兵仗武勇者也兼坂東椽也
弁問云いらやうある人の友そや　一答内舎人て侍の足帯劔之役
うらんのあらふとりふと　左を左て菩の衆人なるへし
よれ人の御中とらは　義白かるの問の半し
とのうらんあらうりていさらかるまいもおるをしなると

義白との事の時節余あらせしとくこさひしるへしとし
まうよの侍ありこさハ　秘ことひの治ありこさて治やうけとと
白の先ひらくおとらせし時の半なへし
是まて縁とれをとこかふへらせまりるかまし　義侍あのかひ白とへ
へらせるるとたへとて侍従ともふとし
寺し菩の廣うれおこされらく　秘白衣の祥をとらふし　弁
るのとこさてそてとし治ふなりぬる　弁かるの半し
義菩のらし菩の知行むりとし足ふあそかくとひて乱るれと
よかりんとといくきてうん時もて　白れ何をとしてねくらく
まみとうし白とあとしの升人太平との人つ気またハいうとし
まはれハいうて去れるや　しきふの縄
くうこあてとけるれあと　忠臣不事二君貞女不更二夫史記
かられとかりゆへしそ　秘右とし
義右とそうなくさしりる旭　義人為れかりしたなせとてして
もうしの半なるとうりの治かつ祥とし
あはしめへてさこ半をとてそうしぬるかに　治母半七ハ大竹るて性ると云

いはくはとせさせ給はへし　箋 白氏文集の詩つくれるにかくたまへ
さ候て何かはなんなるまてなり
心しつまる事かくさり　右近侍従なとし
この人々にけらんきよ　今も東宮の乳母の侍従の乙まて申にし
知らいそくさ候なり
そのこまなとの　乳母のなやましきこともつかなりけりし
庭より八夕のにし申るまつとた　心 みの正すまとへまれ渡
私 葦のち流こあるみちと入されくのより云者とし　箋 右近の乳母かり
これおほしうちねりといふもののそこにてつる
申し内舎人て
おこされのまうれさんの母こそうしこさある　内舎人かさ候し
女房よりのとり申さんとし　内舎人の女まへりの中さんとし
文ふ給へし侍しか八　秘 内舎人か申詞し　文ハ薫也
侍ししと侍らまこつるはいても　雑変也し
うてそおもてしまへれ私ふ　乳母の宮侍よおとく侍る事し
そのけうのかいとひさらしさうらん　との井人のとりしめる

なのめならぬ事のはなはいよりく　内舎人か平生のこと候也
用候ことこそあり　箋 内舎人ことさき上下日とも詳て
されとことひしやうのとと　ハ如然　此常卑
秘 さやうのことはし　此常ハよのつちなるめし
よういしてさふらへ　是も薫の侍の趣し
あやしのものとかいりもおそれ　秘 右近か心畏とおそ
ろしさ思ひて　かかいてり此内舎人か語といへり
本 右近か心畏とおそろしさ思ひそえひする女房とひとうと女也 箋
河 おそろしきこといの事といふ世俗詞の事し
さりやおほしまたしいかりあ　右近の内舎人かいいうくの寝殿及ハあて
いらへもやりて　これハ内舎人か申つるさ候そ也
右の侍母へ申し詞し
侍せうもととて侍るなよ　箋 薫のみのなとさ候なりけくし
外のことハ夕のうちこさりて　箋 是ハ子細と八さって道人おとの
用なりいりとられしきとものこて
見れかりてくそれし　との井人の代よりちとあまてかるし

夜行（やぎやう）のとうらんえぬ　よ侍りなよのみすし　うさゝあめのふし月さそて
こゑをきゝわたりいまはゆかうかぬめへさ
そこなひたとえひちらし
家よりはいひふくとし　あはれふの家し
いけのことわりかさなと　秋　川のかなアリ身に藍同
ゆゑふありんそのはいつそ松のきのいけのこゝれくりのとさとへ
松蘿の藤りといふるしまお姉のゝかへなり
とそまかくてもえひとゝもくみ　ゆは西のもとえひとうなゝ申し
むかしいはまくらもちるへのいはまとあこされとえひとうつひてるはそて
身をなくあかさもとりしもえとりれ
ゆ大和物語云むかしつのくにゝすむ女ありけるよハふ男二人なむ一人は
そのくにのうちいれ住男姓ハむはらなんいひけるいまひとりは
いつみのくにの人しなりけりちぬとなんいひける男代年よはひ
かたちのかんなとてあわしいひりそえとむさうしゝゆゑふうんふくそて
あくせかとそゝ心ざしのかほとく同しやうし　それハのあ性と
こゝゆひぬりのそこなまるハ同し格ふとこんいつまするとゆしく

なくもあはれなるひとひぬはべるのむさうしのとこうなうはいま
みなくあつめきまりけまでとこれをこれも月見ふそへく家にいれ
よくみくさしとへんせくなさらるのとこはまもハこれはま
も同じ椎ふとこ度とりいまねとこれよりもれよりもあかされ
おやそてりあんらるしく年月とへくゝ人のなけきさとてい
つさみもとさふいとくいとをしひとりくゝみ手まをみのさひも
終なんといふ女みてさなんとらふと人のくさうしのあかし椎なる
みこゝうひぬるさうらはいりてもへさしえそのうきいく生川のほ
にいてゝえうなりみをうらそてかうらうりのれハこのとりひと
とちをひゆ取りて親のいふ椎このゝきなる物なんえひとうひ
侍るもいるふまれく此うなをえひさきめん武ハ考をえけてより
いまはるもえあれハことあかしろそのあいくつてさゝうなしこれハ
ほとをしさぬしといふは母にいとかしこうよつこひあへてりゆさん
みえふのあまりまゝ此川にうちすてゝ侍るあるとしいゝへをれゐい
あてあらう人ゐなむとらふにいとうこさるしといひてゐる
に一人をかしらのあたへとのうこそといつそのきれいつまるとえ

㒵くもあらぬにとひとひとく女住わびぬ我身なけてん津の
国の生田の川ハ名のミなりけれとよミて此川よりハ川ふのそこさ
てまろうたつかまへおち入ぬり親あさましきことさはぎてのゝしる
とよばふ人々あまたありなから座てておもしろき事にいひけりね
万 いにしへのさきた男のつまとひしうなひおとめのおくつきところ
うなひをとめハ男なけれハ女もさらにおとこ二人ハ思ひ二人の男も
あくたかハあさつきと云しをさハ息してさハ思ひいきれけるも
花 万葉巻第十六云 昔者有娘子字曰桜児 于時有二壮士共
誂此娘而捐生格競貪死相敵 是娘子戯欷云従古来于
今未見一女之身往適二門矣方今壮士之意有難和平不如
妾死相害永息爾乃尋入林中懸経死其両壮士不取哀慟血
泣漣襟各陳心緒作歌二首
はるされはかさしにせんと我思ひし桜の花はちりにけるかも
いもか名にかけたる桜花さかハつねにやこひんいやとしのはに
或云昔有三男同娉一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露
三雄之志難平如石遂乃彷徨池上沈没水底於時
其壮士ホ不勝哀頽之至各陳所心作歌三首 娘子字白濟兒 有三歌略之
秘 花鳥ニハ万葉十六をひきてつまとなりける縵児子也大和物語
ニミえたるハ万葉ニ見えたる事をよみて万葉十六にあり
弄 桜子の事なりけれハ万葉ニ見えたるなとし万葉十六にあり
箋 河海ハ大和物語 花鳥ハ万葉いつれも用へき事也
私此きさハけさうしたる人のあまた有事をみさゝきを捨
ぬるにつき此浮舟ハ思ひ二人の中にありされハまよひ
さりへの事いつまてとなきされと思ひつゝ入水をせんとて
身をなく涙をもとしていつり此浮舟ハ思ひて身をなけ
ぬるかとよんてけんとよみて男を捨てゝ世にもなき事也
とこはまさるつとてん 孟抄不哉川ニの
箋 川瀬のおとにそのつゝ 花鳥にハ身をなけんとし
さなからまてそこなひ人ハもとなるさかへてされハ浮舟の
ことなるへし 弄 此詞浮舟の心をもとなりし 孟感
浮舟は身を捨てつれハ母の一旦のりのさうかハしと也なとも
とは存念のなくしなくしてちかくさかへハりてそこに

ひさもしくん清母のさ浦と母のたりん本ハくさうなきよしきこと
たゆんきこえれしらんへらとくしこ思まて　巨之大庭うあて
大庭うかきこくれくきこハ清母ハなうしとく
世乃さそ波とけらくもちてぬ名ふ入るもとらうし　遍昭公おほとど
おもうるへきるすと　行おそうるへきし
おそくしきてるし　清母ハ御中にそてきち清ひしみうりてあらく
しく独そ清しきこるんとえひこえあひしとあ方とあれとえひあひあし
秘　东のあうそてもも為し人なれハ心とさるけなうと方人とあへき来し
むうしきほくなるし　行友古　白氏文なるへし
一しひみて志てし出ん　人の関ふる川もりくあてると
とよし名いの出ふやさ　行桃蘂し
物へとうりまるへれれハ　義かりはかへとてら清りんよし
表なる御中にたひとし紙そて出かうり
さえくりめくく友に行くしつひ　義白氏文のさ庵し
け心につきこるかしの文あひとりて　傍従納白氏の中吉し
花ちてれ蔭状とつくふるすし

なふうもつうしくあうく依きしきき
なるかれの抄よりひなし清てと白中ハ方とるえんの立花し　秘清母の細し　あやまりしま
人の行くあそいそれしかへん　白氏の年し
さうし在ふこれとどうりてむ　さうえう行し出る名きき抄の白ぬ
ひかそこあもと純とひりてゆくれそ　方とあく御来もいろくれまと
とひくいふ色ふうりて舞まうしこさるすしとふし比所のへのまん
さん紙ナりのふ元としまてあるし
あやとと紅てなくなるる人をいとつし婦るくなるりのと
行新をり前るる川ハ不孝のてしと云り　初み末勘し
義新をりそれあつとの雁なるかのしとゆのしと白ふかて修し必やそ
きるみととひりてゆくといてり　清女の　て
まゆうあまりみてなりぬ　秘二月のまこし
うの家行るし十八日にてつるへし　秘もんへ小白氏文京へさこ
まへしとて開こし清へ御ちの此の申文の家の申し
義うの家あるし任あり　鋪くなり
文るその在う持ちん書くんと　十八日より任志ふなりむうハとる

我その時は清和との家へうつさんと白玉の宮にて
らうひそかにぬすみたるよ　白玉の名のさ候
さておかしきほどにかくおもしろきんよ
秘 清和の后　義 白玉をひておりてけるおりふしうさき母の名也
いとしくなきさまよ　うさて母のさ候
かつみえる御有さまなりき　義 右在原の業平といふもの清和の御門の后をぬすみてかくしけれ
紛れなりけれは清和八人のうちにとられんとしてけるとかくし
さる人さはりけれ　義 白玉へとあふかんとおもひけれと右在原の
ちいされと身をもひけり　秘 右在原清和のみかとの后を川とこそ申しつかはし
ともしう身をあらひて　義 あさんしほとおもひくるし清和の后
かくみしかてよひかくれ　秘 清和の旧
白玉のなやめるはかりうさぎの名とて
いかなると紙よむなるんとて　義 白玉の川にてはなしにまつ
これ本とおはしけるに白玉をとるものとみけるはいとおもしろ不思儀なり
あはれてとそれるとて　ひさとなりけるとし
うきりしるとやかもくれなかる　白玉の名のとるとあかりぬ

白玉の清和の后
あつくはしらけしをかしきさて
なれとかたれおほえし　義 白の名をかりるのやう云ひし
うれ人のまるんなさ候けり
あるへてかくて抱しのへなりけり
あはりとおはせりのうへ　をかりなる人国なを右論する
なかれて白玉くちおしくあかれし
そのいひあふる家　さかしぬへてもとまめし一本はるかに
いひなしくるとしをたかれなりけり
あらしこ所ふれうち　義 川の河にアリこれ芥川とは下に合し
河これを此うちてしれくさなり隻となつけてと云ふ人もありけれ
あつかれのまれにりてんまいなりけん　秘 河しのかし
義 白玉清水おもしてはさ候し芥川中かりて入あひ芥垣し
いさとけなり　義 さかしくしとし　月見えあるし
芥物のさとれにむなり
京よりとこのちかし　いそれの名とりて
とことに伊勢物語にたいそれの本とをとしとほしてて

うちんのをさされ居と　古きの従者れ居し
さかれおよひたる所よりなり　秘 今夜ハ廿八日佛事とし
花 不用し　こよひハ法花の事もあり御しこさんなり
あさきとかくのくたくしなるらん　白氏也なり
と我なることいりたりそて　義 時方か云様もし
かくしこゑ人かく　秘 時方也　まち人たるへしとて
いられ給ふかあやしのかの也　侍従の詞し　かりそめにわたる
くるて 仁付しきせみかなりけりとて
おもへあるも独そのし　侍女のりのこゝ侍る夜をとるし
と給ふよのつけなこ給　義 白氏のやうに来て云ふなり
さきまつ人来ても叶けれ横着と思てこひ給へくなへしとと
なにてさま御心にひきしも侍る夜　秘 御夜をかきに御なし
時方もしせなられ時節二葉内と取りて身へなへしとと
弁 白家の京人か人ならんしてさて侍女んそのおとりて
私 弁若代御手へしさまなりひとハ京人と云て侍女ん所な
はかひの敷のけて葉内と御しれしかしのあかりらんとし
○花の物ニいさらしさしし　秘 さししきし

○義 内のたのしのいさらくてたくらりかこしとり　みゆふとくし御とからの
私 たまへなまなれハいつくあらしておりしてむなしく帰り　秘 時方し
給ひ人来を云ひて侍従とらしてゆへんとさそふしせあく八
白家へ侍従と身ならせ身てをうへんとそて
いとこうりなりらん　侍従の詞し
はとひくなる色あつる犬とも乃　河 犬吠村胥閙　蟬鳴織婦妊
白氏文集之　守家一犬迎人吠　放野郡牛引犢帰　朗詠秘説アリ
ひ さとひたるハ里別らるし又さらしこさ仏みてるへり
秘 犬のおりのさとさとと云義アリ　仏山里とつかといふ義一説し　弄日
なれしく来りなんといひきつして　時このひそかれ
つして侍従をとらしてとあるし
うこつきこうりひこうして　義 髪を脱のトよりまれかり待
こよあわをれをとりて　侍従かことめのたそを時ここととうし
こりこりをとへりせく　時方か当と侍従よたとせなし
山川乃かれ猫のさところむてのまれおかりしとふりのもと志さて
秘 河内本むつく家としたり

祢 あまりむくつけきこといふ心也いつまでもまでもありなん
河 おもはむこゝろのまゝにむかへ給へといふ心なり又むこの
万 すこしのさわりありてこゝろにむかへ給はでやまむこの
或本 河とりといふ物とも ことり 泥障 アフリ 泥障 ハ
一本 河とりしいふものはしはしさしとゞめたり
花 大和物語に此の中にあまりと哉くせといふ物をかくゆるせり
うつほ 巻ノ一云ソのまたの大将ナリ本にもそのひこさくむかへ給ひを
ところで毎乃よ多女哉て女母年をへうるよしなり
今案河とりむかへ給ひ出本遠きことをいへるお袖の花桜狩を
もおもなれにあさくきと思へし紀有常の物にいまつ
此大将の車ハ一乗日小野宮大納言の人て持衣を遣てむ
さきをたへ給ひしをは思ひ白木て宮給への白ひ下にすむ
衣とこさまの院よむかへなれはとまさのよゐやなとりハ参りて
はぢる物なれハ見え給ひけ侍るへうれもちゆかしかれそさの
とひつれた本これを河より出日ひもり准様なる上十
りつれ心ち給て河やしきこゝもゝ夜かれ〳〵給ひむ

秘 もとの在原ハ紀有常の花ふかし 蒙 白氏文集男は浮かへとありて後ふし
なからゐ人への往ましく 作泥の車し
いふしきことありて往くりおりとて 心 あさこあかく思へ
秘 いかなる悪鬼神なりともかなし又ありて紀あかしと云なり
在原ハ紀有常へ或説 なき悪鬼ハさして家朝に及こなる
さむの仏なるをまへし家に悪鬼の仏あるへからく悪鬼の
かたちあるもあらかし 蒙 浮ノ蒙引
祢 あさおかしとみるか本河り悪鬼神なりともかなし
もしこそえさてしさんまへしきり 秘 白氏文のことは業し
私人のいひなしかくしてありしとりかて
ときは夜ならしく此のとて これ拝も作泥のとかくかし
さありし給ひさん日とも 蒙 いつきおもしかす日紀宮へ此
をも白へなんりて家かせんといひし
かくしきをかさこととも思ひ 白氏の家は又女の内御中とも作泥
ゝ衣ありくいふし
身をもとて母て 秘 作泥の家ゝ身をとまてし

あまた人めなきといふらし　白居易人の純情く頭ハ名の
ありなとえらひてまふうらん所をもなりしと覚えたり
ある川なるらし　宇治のとの井人の注也
ひかりやりしなとりふも　秘 夜行のいてし
花 誰何火行しなく火ありやりしとよむ也　夜行ときなるへし
孟 已陵酔尉謬誰何　皇殴
白 いはくにはあまとハ是そんとまつ云のへらぬ山てなりくうか
孟 まつ云のへらぬ山さてちとあるを証也
証抄ニ義なし不明くれなる旨注なるへし

けらハえひやしとて　紀伊の守と注し入るへき歟
なくそくりこさう所　紀伊の守也
右近ハえひきりつきよし　秘 右近とハかみへまうしきよし
と中もしうへとひかへ所ホなり　孟
弁 紀伊守の女の所なりしかひとつ注りて右近とゝ白女のあそ

きのかみ入給へんとかゝらひうしといひまからうきこゆに
かくろかへりあまき紀伊守か注りて是見えたる注なるへし
見えいらく　うつせみの弟也
いりさまてあこうか注なる所　孟 紀伊守也　秘同
わかきいへ母に注ならんと　紀伊守か弟と注あるそ
わかしうらんまつ紀伊守へし　秘 紀伊守注に注しるるまことを
まちかきなり　孟
ひこみしなり　河 無証也　私是証もなくいみしくうち
おくれをもふをひらちくもまもとしく　花 ゝまと常也　秘同
弁 うつせみ也うちくきて兄也。ゝまと常なるへし
孟 これハ虚りくしと起てけるなし
ありふされなちなんつゝ　孟 男を捨んるとこひさてるゆゑ
おりし名をとりたる　孟 白女の注也前ふうさまる
と二人あるいはゝ所をとくさまうるまふまり
まへ日きたるとさに　白氏の人ありさりし事と源歌へし
人のもれ所き注ふく　秘 まへのまもよきほくふさひ也のなし

箋 かゝるのなけしくさ二母の名なり
うこさ後にいひなれんくて　秘 なきさわちにさ後くこさうれん
末のくちさとしきてなり
箋 身をさてなみとうこさ法よりひなれんくて行へんをれそ
なつくへてくへるらるれなつくんよろ可を合をとひ空るを
ものさくへもらく　花 後ふきそくるしくくれとし
うきみか なる人は後身をいはるゝてなかる親母うこさ名なりさん末とてえ
秘 名のおくん末乃くちすしきてとし
箋 身をさてくりをそうこさ名ハおくんとし
後ふ見え出ふる二つもつふ母を見いてんをうきり　此外説のすより 定箋
あるかゝるのこゝふくやうなるて　考清り後母の一後の身あると
文のさくへとおりひ出てく　中二古の末し
人母見えつけらまでん出行へきさ　後母の思身なりん為し
色ちをおしくころかさらひみなり　ことりの承へくみよろり
てりのてよりくかるし
あけぬるく八川乃まへと　松川寺ふおよりん

河 柳をみてハせこのありさくへるさくしようらんハ筆のりしとそ後され
まけしのおもしようりくも猶なの残らちん
花 ゆふまちる　むかしのおもひをそふるらなれとやしなれもしらつさ出ん
河 歩々近死地人命亦如此　経文
屠所牛歩之喩也 屠所ふハ牛を殺さて食けふ為とてそ屠
所へおひくして殺さし歩ふもてひて死地ふそくさ居 の喩也
又ハいうしきさるけしきを　秘 白文なる所に見し
いまさらしに人やらんと　後母の心し
うきみか つらきことにたへうこさ世の中にふとし絶れんといつて後なくなして是をとうこそらん
河古 うつ蝉ハかくとありてもなくて世をれ川淀むの心るよりぞ
ふくなるてくさなまし　あと思ひてもいつてとあくしと元のてとハ後
松不及引弄也　秘 入道の心アリ
箋 うこさ世ふとしなめ身なつこハいつとさいまりにも根し絶れんとと
秘 思ひふさ思ひのゑさくしふなそしてそれハ又人為なれハこう
孫ものみ末しておもひ心ハかくると後世ふとて絶へしとし
之文をいまはの辞し一切　箋 甚し

いみしかりける夢にみえしかはいとおほつかなくて
弄 人あしからましとて身をよろしうならんとのみおもひ
孟 おほかたの人のいむといふことなん
河 鮮夢書云夢見痛死必死　秘 河海にしるす　弄 日
孟 夢はさかさまなる事もありといふこともあるを
おほしなさるゝ　弄 誦経して京より母のかたへつかはす
とひてまゐらせよなとよ人のゆくゆくに　必 夢のことなとはなし
孟 夢のさとしにより修法なと行はせたまふ
みなやまひつきぬれはいかなるらんと母のとふなり
かねのおとの　孟 後の母の使常陸の女房後の出来たる
いとしくいひてかれにかへりて　孟 母のかたへ此使をとまらせ常陸の
剃しいかて
そのちかき寺　山の寺　河 寺の寺
きよのまてりの　誦経の料
多くなりてあそんてく　孟 誦経のみとくに
秘 してその寺へみちとてそへてやる

くもりもとにかいもなく　後の世の夢にこそとも悲しくくみをしかるを
後にまたあひ見んことを思はなんこの世の夢に心まとはて
秘 此世はかなき世のたのむへし
孟 表は母を対面あらんへきこれはさやかの夢なとしてたのみもなきを
いまはかなくとも裏は来世なりとて後世にてもまたこそれは此世の夢
のうち後よりひきなしていさめたまへ妙なる歌
秘 今生はかなくは後世まて来世を頼せらると表はさはなくしてそこ
もさきやうにその風につきて　とさらの誦経の鐘
弄 此詞その心をみよれかの夢へしよくくらる
うちのまことのこゑよりもまさりてあはせつかふへし
孟 是はそのまことなくなると聞えく
秘 弄に義なしたるふてもなくあはれなる弄
くらんそとてこちらの所ふさきつけて　巻数
弄 誦経してなるまて枝につけてさしひし　秘 誦経の枝なるを
りのえこにはひつけて
鐘のかねやしく心えつまをるかれ

河 人にありんてさのなさんれそとゝをとさそてむつかしく了る心帰けとゝ
なるしアヽはむつかしけ思るへし　漢書高紀下曰上欲
宿心動 已上河
秘 むれさりさこのをるし　再見にのこ　箋 めのかしハまうし
ゆゑもさそうしけて　箋 うこさふつのゑてれゆへし
ゑるしかとさて好し　秘 流にの色し　入水のなれ心
箋 その弁人いさとくハ思ひをされたし
さうしかうゆへまていとみにくてそひなうて
秘 めの水乃さ流のさうしくにつゝひけの中れし珍才なくしなほ
いてなくんをらんと苑てるとこそ義とといのりて　弁箋
世中にえありそつものしきさ自と　はすさとはなくて左
をなきれりの先つしるさきし流乃おとつうされてすれこそハ
えしひ出るりぬとあり
くれしりの緒てありけきは　右色ヶ詞し
おそ人のもしねハ　箋 うこさ母のもし　ねのうれ
て母の着なとて侍えりしきなりんとし

いつまへておはしさうこありて　箋 ゑとまへお流
すれおかりけさ先によなり
なへるさぬとうり母をしあてしかしまへうしとなん
箋 流に母の祥し流よむきひるる祥し